

行方郡玉造城跡本丸発掘調査報告書

付 二ノ丸・藏屋敷確認調査報告

1990・3

玉造町教育委員会

行方郡玉造城跡本丸発掘調査報告書

付 二ノ丸・藏屋敷確認調査報告

1990・3

玉造町教育委員会

序

玉造町には、中世の在地領主たちが館を構えた多くの跡がのこされています。その形態は様々で時代的あるいは氏族ごとに相違があったのかもしれません。

このような城館跡は、古くは平安時代末から戦国時代まで長期にわたって築造され現在にいたるまで保存されてきたのです。また、遺跡周辺に集落が形成されてきたため大規模開発からのがれられたのです。

しかし、最近の住宅事情の悪化による宅地造成や道路の整備・改良工事による開発行為が顕著になってきました。とくに大きな城館跡ほどその危険にさらされています。

今回緊急の発掘確認調査を実施いたしました玉造城跡も、このような状況のもとにおかれ城跡周辺に各種開発計画があり、事前に城跡の概観を把握する必要にせまられてきたのです。腰曲輪部分にかかる道路の改良工事、本丸の宅地化、急傾斜地の崩壊対策工事等の開発と、県指定文化財「大場家住宅」周辺整備計画による城跡の保存活用に対処するために重要な調査となりました。

尚、この調査にあたっては茨城県教育庁文化課のご指導をいただき、文化庁と県文化課の絶大なるご理解ご協力の下に、国庫補助ならびに県費補助事業として発掘確認調査をすることができました。末尾ながら心よりお礼を申し上げます。また、寒中ましてや雪や雨のおおかった時期の調査にもかかわらず、発掘から整理まで担当いただきました岩松和光先生には衷心より感謝申し上げます。

平成2年3月

玉造町教育委員会教育長 渡邊正則

例　言

1. 本書は行方郡玉造町甲5,761他に所在する玉造城本丸の発掘調査報告書である。併せて玉造城二の丸、蔵屋敷の確認調査を行った。
2. 調査は玉造町教育委員会が主体となり、玉造町遺跡調査会（会長　並木　亨）主導のもと岩松和光が1990年1月末から3月末日まで実施し、併せて整理事業を行った。
3. 図面整理、遺物実測、トレース、版組み等は原喜代子、沼田洋子、鬼沢正子、小島清子が岩松指導のもとに行った。
4. 本文はI-1を高塙栄治、他は岩松が執筆し編集した。内容に関する文責は岩松にある。
5. 「玉造城縄張り図」の作成は、高塙指導のもとS=1/1,000現況図に墨入れが行われたが、これにあたっては『大場家文書』に残る絵図面（江戸中期？）、市村高男氏（中央学院大学専任講師）の玉造城概念図等を参考にした。また今回の調査にあたって玉造城内名称は主に上記の絵図面に従い、そのとりまきについては町史編纂室作成の「玉造町字界地形図」に拠った。後日機会あれば適宜修正されたい。
6. 玉造城内出土・陶磁器の鑑定は、出光美術館の荒川正明氏にお願いし、これにあたって戴いた。記して感謝の意を表したい。尚、ご指導戴いた成果は本文中「遺物観察表」の中に盛り込んだ。もし誤った記載があれば編集者がその責を負う。
7. 調査中、事務局の方をはじめ、関係各方面の方々にお世話になった。記して謝意を表する。
8. 調査体制（調査参加者、敬称略）

調査主任　岩松　和光（日本考古学協会員）

調査員　並木　亨　小谷　和弘

作業員　田中　孝治　田中まつ枝　甲　タキ　甲　正枝　大和田キク

箱根　幾　代々城百合子　額賀　豊　田沢　こと　甲　洋子

甲　いつ子　成島　謙二　野原幸之助（以上地元参加者）

菊田　浩基（茨城大学）　宮本　俊雄（教育委員長）

協力者　並木　亨　成島　謙二　田山　信男　鈴木　亮然　野原幸之助

茂木　彦宗　風間　亨夫　森作　武夫　手賀　黙　小沼　典章

（以上文化財保護審議会委員）

大場　律子　宮本　光子（以上土地所有者）　橋詰　芳明（土地管理者）

柳和　芳雄（内宿区長）　大場　浩一（内宿区長代理）

事務局　玉造町教育委員会

渡邊　正則（教育長）　石橋　静男（教育次長）

中田　邦雄（社会教育係長）　高塙　義夫（社会教育指導員）

高塙　栄治（社会教育主事）　小谷　和弘（社会教育主事）

目 次

序	
例 言	
I　調査の契機と経過	1
(1)　調査にいたる契機	1
(2)　調査経過（日誌抄）	1
II　遺跡をめぐる環境	3
(1)　玉造城の立地	3
(2)　玉造氏の成立について	4
III　調査の成果	6
(1)　調査の方法	6
(2)　本丸の遺構	6
a　溝（SD 01・02）	6
b　井戸（SE 01）	11
c　掘立柱立物跡（SB 01～05）、柵列（SA 01～03）	14
d　方形堅穴遺構（SI 02・03）	14
e　土壤（SK 01・02）	14
(3)　本丸出土の遺物	17
a　土師質土器・皿	17
b　陶磁器	17
c　瓦器・瓦質土器	20
d　内耳土器・土師質摺鉢	22
e　印花文・刻文	28
f　石塔・石臼	28
g　石製品	28
h　鉄製品	32
i　古錢	32
j　その他の遺物	32
IV　玉造城二の丸・蔵屋敷確認調査結果	34
(1)　二の丸確認調査	34
(2)　蔵屋敷確認調査	34
V　おわりに	38

挿図目次

第1図 玉造町内の城館跡	5
第2図 玉造城縄張り図	7
第3図 玉造城・本丸調査区全測図	9
第4図 井戸(SE 01) 実測図	12
第5図 掘立柱建物跡(SB 01~05)、柵列(SA 01~03)配置図	13
第6図 方形竪穴遺構(SI 02・03)実測図	15
第7図 土壙(SK 01・02)実測図	16
第8図 土師質土器・皿(1)	18
第9図 土師質土器・皿(2)	19
第10図 土師質土器・皿(3)	20
第11図 陶磁器	21
第12図 瓦器・瓦質土器	22
第13図 内耳土器・土師質擂鉢	23
第14図 印花文・刻文	29
第15図 石塔・石臼	30
第16図 石製品	30
第17図 鉄製品	31
第18図 古錢	32
第19図 その他の遺物	33
第20図 玉造城二の丸トレンチ内遺構確認図	35
第21図 玉造城蔵敷現況図	36
第22図 下造城蔵敷テストピット実測図	37
第23図 玉造城二の丸・蔵敷出土の遺物	37
第24図 土師質土器皿分類図	40
第25図 行方・玉造氏系図	41

表目次

第1表 遺物観察表	24
第2表 遺物観察表	25
第3表 遺物観察表	26
第4表 遺物観察表	27

図版目次

- PL 1 玉造城本丸（写真中央）
- 2 玉造城跡とその遠景
- 3 南北（A）・東西（B）トレンチ全景
- 4 遺構と遺物出土状況（1）
- 5 遺構と遺物出土状況（2）
- 6 遺構と遺物出土状況（3）
- 7 本丸出土 土師質上器・皿
- 8 本丸 SE 01 出土遺物（古瀬戸瓶子ほか）
- 9 本丸出土 瀬戸・美濃陶器と中国磁器
- 10 本丸出土 瀬戸・美濃・常滑
- 11 城内出土 印花文・刻文
- 12 本丸 SE 01 出土 石塔・石臼
- 13 本丸出土 鉄製品
- 14 本丸出土遺物
- 15 玉造城二の丸・蔵屋敷出土遺物

I 調査の契機と経過

(1) 調査にいたる契機

玉造城跡は、茨城県行方郡玉造町甲内宿地内に位置し、市街地にあっては緑のこる自然の公園を呈している。根古屋周辺には先祖を玉造城主玉造氏の家臣にもつ人々が現在も生活している。

1591年、佐竹氏にはろばされてから400年の年月がたちますが、今もなお供養をつづけている。最近の古文書調査では玉造氏関係の資料が発見されている。

城に関する資料は、江戸後期に画かれた村絵図があるだけで、その具体的形態を知る術はないのである。

玉造城跡は、昭和初期に鉄道の線路工事の為掘り切りの一部が削平されてしまったが、当時は発掘調査を実施していないので調査資料はのこっていない。

昭和63年度には、町道の改良・延長工事と地区集会所新築工事にともなう土採取の為、発掘調査を実施している。このときには、開発部分の調査であったが遺物等の面では貴重な成果をえた。

その後も、この遺跡は玉造町駅に近く市街地の中の丘陵ということもあり、景観のすばらしさは格別であることから、宅地造成計画も着々と進行している。また、道路の整備についても住民から要望があり近い将来工事が実施されようとしている。急傾斜地の崩壊対策についても平成元年度より工事がはじまっている。そして、こうした開発に加え県指定文化財「大場家住宅」周辺整備計画による城跡の保存活用のなかでも玉造城跡の現状把握は基本的に必要である。

こうした状況を茨城県教育庁文化課に説明し現地を踏査していただいた上で、その緊急性を理解していただき、今度の緊急確認調査ができたのである。調査にあたっては、文化庁と県文化課の指示と協力を得て、国庫補助と県費補助事業として実施したのである。また、土地所有者ならびに地元関係者の温かい協力により緊急の発掘調査をまとめることができたのである。

(2) 調査経過(日誌抄)

- | | |
|-------------|--|
| 1990年 1月29日 | 9時より調査員及び作業員打合せ。11時より地鎮祭、午後刈払い。 |
| 1月30日 | グリット設定、杭、水系張り。午後Aトレンチ、Bトレンチ掘り下げ。 |
| 2月2日～3日 | 前日の降雪により午後より作業。Aトレンチ拡張。Bトレンチ80cm掘り下げ。 |
| 2月5日～6日 | 調査員、事務局打ち合せ及び資料収集。二の丸、三の丸、曲輪等写真撮影。Aトレンチ南荒掘り。 |
| 2月7日～8日 | 玉造城周辺の写真記録。Aトレンチ南擾乱部排土。 |

- Aトレント確認作業及び精査。確認面写真撮影。
- 1990年 2月9日～13日 Aトレント南重機等攪乱排除。
- 2月14日～28日 Bトレント東端に井戸状の遺構を認め掘り下げる。Aトレント南面、Bトレント西面のベルトセクション、BトレントSE01(井戸)拡張部掘り下げ。Aトレント遺構調査。Aトレント東面崩落。雨天により午後より遺物洗浄。遺物の出土状況調査。
- 3月1日～6日 Aトレント、Bトレントセクション実測。遺物洗浄。Bトレント調査。SD01、SD02(溝)、SK01(火葬墓)、写真撮影、セクション作成。
- 3月7日～8日 重機によるSE01崩落部拡張及び排土。Bトレントピット、セクション作成及び注記。AトレントSD02、SK01調査、ピット半戦。
- 3月9日～11日 SE01鉄滓塊まで下げる。排土のための電動ウィンチ等搬入、Aトレントセクション注記。BトレントSE01鉄滓塊半戦。SE01セクション注記。
- 3月12日 遺物洗浄。
- 3月13日 SD02、SX01出土の遺物取り上げ。SK02ベルト撤去。SE01鉄滓清掃及び写真撮影、平面図作成。
- 3月14日 Bトレントセクション注記。SE01鉄滓撤去及びセクションベルト撤去。電動ウィンチ稼動。
- 3月15日 遺物洗浄、Bトレントセクション及びA・Bトレント内ベルト撤去完了。
- 3月16日 SE01掘り下げ。A・Bトレント内清掃及び遺物取り上げ。
- 3月17日～19日 SE01より五輪塔出土。実測及び写真撮影の上、取り上げ。セクション、平面図作成。
- 3月20日～21日 Bトレント平面図作成。調査員・事務局打ち合せ。
- 3月22日～24日 Aトレント平面図作成、A・Bトレントレベリング。全景写真の撮影のため、トレント内清掃。
- 3月25日～27日 遺物洗浄及び管理。蔵屋敷テストピット1・2調査。現況図作成。二の丸調査。遺物整理及び注記。二の丸東西トレント確認調査。
- 3月28日～30日 遺構埋め戻し、器材整理。

II 遺跡をめぐる環境

(1) 玉造城の立地

玉造城は玉造町の中央を南流する榎無川左岸の低台地先端部に立地する。標高28m前後の台地上からは町の中心市街地が眼下に広がり、谷を挟んで谷島・諸井地区を間近にのぞめる。更に榎無川河口から霞ヶ浦対岸を一望でき、好天日には筑波山や遠く富士山を視野に収めることができ。域域の縁辺部は椿・タブ・ヤブ椿・シラカシ・ムクノキなどの自生林に覆れるが、台地下周辺の平坦部は概ね宅地化しており、「藏屋敷」の西側には玉造城に伴なうとみられる外濠が部分的に遺存している。郭の展開する台地上はやはり宅地や畠地として利用され部分的に削平を受けた箇所も認められるが、本丸・二ノ丸・三ノ丸は空堀や土塁とともに比較的良好に遺存しており、現況においては二ノ丸南にある「中館稻荷」を除いて他に建造物もなく中世城館跡の構えを今日に伝える好例といえよう。

現在、町の中心街を構成する内宿・上宿・下宿・横町はこの域域を取り囲むように展開しており、町管内を縱断する国道355と県道土浦大洋線は市街郊外で交差する。また石岡市と鉢田町を結ぶ関東鉄道鉢田線が当市街地を経由しており、玉造地区が郡内北部における交通の要衝であることは自明である。霞ヶ浦を利用した水上交通は玉造町でも浜・羽生・井上といった汽船寄航場が昭和6年頃まで運営されていたが、その後は陸上交通が主力となり水運業は姿を消していく。左記の船着場は江戸初期霞ヶ浦における入会権や漁期などを定めた『霞ヶ浦四捨八津定書』(慶安3年、土浦市立図書館蔵)にも掲載された集落であり、特に玉造城の西1.5km程に位置する浜村は霞ヶ浦北津頭を勤める「津」の代表格で当時すでに霞ヶ浦48津の中心的存在であった。町内には玉造城をはじめとして24の城館跡が登録されているが、これ等中世の城館跡の立地条件は行方台地の縁辺部に開拓された谷津をのぞむ急崖地形を利用して共通している。行方台地は標高30m前後の起伏に乏しい地形で、複雑に入出する谷津と舌状台地の重なりは防禦面で死角を生じ易く、城館の占地にあたっては急崖地に面した比較的の視界の開ける場所が選定され、其れと同時に最寄の沿岸部へ「津」を確保することは恐らく築城に関する条件の一つに加えられたと思われる。

玉造氏の菩提寺は一闕等(曹洞宗)と永幸寺(時宗)の二寺がある。一闕寺は玉造城の南に谷を挟んで立地しており開山当時(天福年中、1233)は天福寺と称したが後、永禄2年(1559)天寧寺に改称、寛文年間(1661~72)現在の寺名に改まった。永幸寺は開山当時(文永9年、1272)天台宗であったが後、弘安3年(1280)時宗に改宗今日に至る。永幸寺は玉造城域(註1)にあったものを水戸藩の寺社改革(元禄9年・1696)のため現諸井地区に移されている。

(2) 玉造氏の成立について

玉造氏は中世を通して行方郡北西部一帯を支配した在地領主で、その拠点となった城が玉造城(註2)である。玉造氏の系図に拠ると初代玉造四郎幹政から天正19年(1591)、佐竹義宣により常陸太田で謀殺された与一太郎重幹に至るまでに歴代15人の城主が交代するが、この間複雑な政治状況のなかで主客様々な戦闘に参加するものの版図に大きな変更はなかったようである。ここでは玉造氏の成立前夜に就いて簡単にふれるが、通史については『玉造町史』を参照されたい。

天慶3年(940)、将門の乱を鎮圧した平貞盛は中央公家・貴族の厚い信任をうけるとともに一族縁者を結集することで東国における一大勢力に成長するが、このうち常陸国内の所領を譲与された一族が常陸大株氏を称するようになる。貞盛の常陸国内における経済的・軍事的基盤をうけ継いだ維幹一為幹親子は、中央の藤原実資を後ろ立てとして政治力を駆使し国衙の実質的機能を把握することで勢力の拡大を企てるが、為幹の子繁(重)幹の代には常陸介源義光との間に姻戚関係が結ばれ血縁による同盟が成立、生れた義光の孫昌義は佐竹氏の祖となる。吉田郷を本領とし行方・鹿島両郡に足場を築いたのは繁(重)幹の次子吉田次郎清幹で、彼の3子は吉田太郎盛幹、行方次郎忠幹、鹿島三郎成幹を各々称して各郡内における領地の拡大(鹿島神社領の侵略・荒野開発・津の確保等)・安定に勤めるが、こうした分家にともなう領地分割の傾向はその後も継承され大株氏一族衰退の一因となる。清幹一忠幹一景幹の3代が史料に登場するのは12世紀も末のこと、清幹は建久2年(1191)行方郡内の鹿島社領に領地を有していたこと、忠幹が安貞2年(1228)やはり鹿島社領加納12ヶ郷の高岡郷に領地を有していたこと、景幹が社領に侵入し不法行為を働いたことを鹿島神宮神官等が本所藤原撰閑家へ訴え、撰閑家では建久2年(註3) (1191)政所下文を発して景幹を制したことが知られており、行方氏の郡内進出にあたっては当初神宮社領を侵犯することで目的を満していた一面が窺われる。このように行方氏が神宮社領に介入したのは、長寛元年(1163)、朝廷より奉幣使派遣が中止される頃より神宮社領が不安定な政治状況におかれaitことや、南郡にある下河辺氏等を牽制する一族的な意図が根底にあったものと思われるが、この行動の背景には当時国府において府中地頭職に補せられ大株職復活を果した常陸大株馬場資幹が百済姓税所氏を押えて筆頭在庁官人の地位にあったことが少なからず影響しているよう。この後景幹の4子は各々小高為幹、島崎高幹、麻生家幹、玉造幹政を称して郡内各本拠地に分流することになる。

註1 「永幸寺」記載の絵図は「大場家」所蔵のもの2種類(一枚は古相)を認めるが、古い体裁を有するものは寺社改革(元禄9年)以前に成立した可能性が強い。

註2 「常陸大株系図」「群書類從本」、「行方玉造系図」・静嘉堂文庫蔵など

註3 「撰政前太政大臣家政所下文(建久2年)」「鹿島神宮文書」・「茨城県史料」中世編Ⅱなど

註4 義江彰夫「中世前期の国府—常陸国府を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』8、1985

玉造町の遺跡



第1図 玉造町内の城館跡

III 調査の成果

(1) 調査の方法

調査は平面直角座標、第IX座標系のX = 11,993、Y = 52,768を基準線とし、対称地域にT字形のトレンチを配して実施した。トレンチは3m幅で南北25m（Aトレンチ）、東西15m（Bトレンチ）を設定、調査をすすめたが、Bトレンチ東端で井戸（SE01）を検出したため更に7mを延長し、排水にあたって必要と思われて周辺部を拡張するとともに、区画溝（SD 02）の走行を確認する目的でAトレンチも北へ約4m延長している。また今回の発掘調査と併行して現況図（S = 1 : 1,000）に基づく「玉造城築張り図」の作成が実施されている。

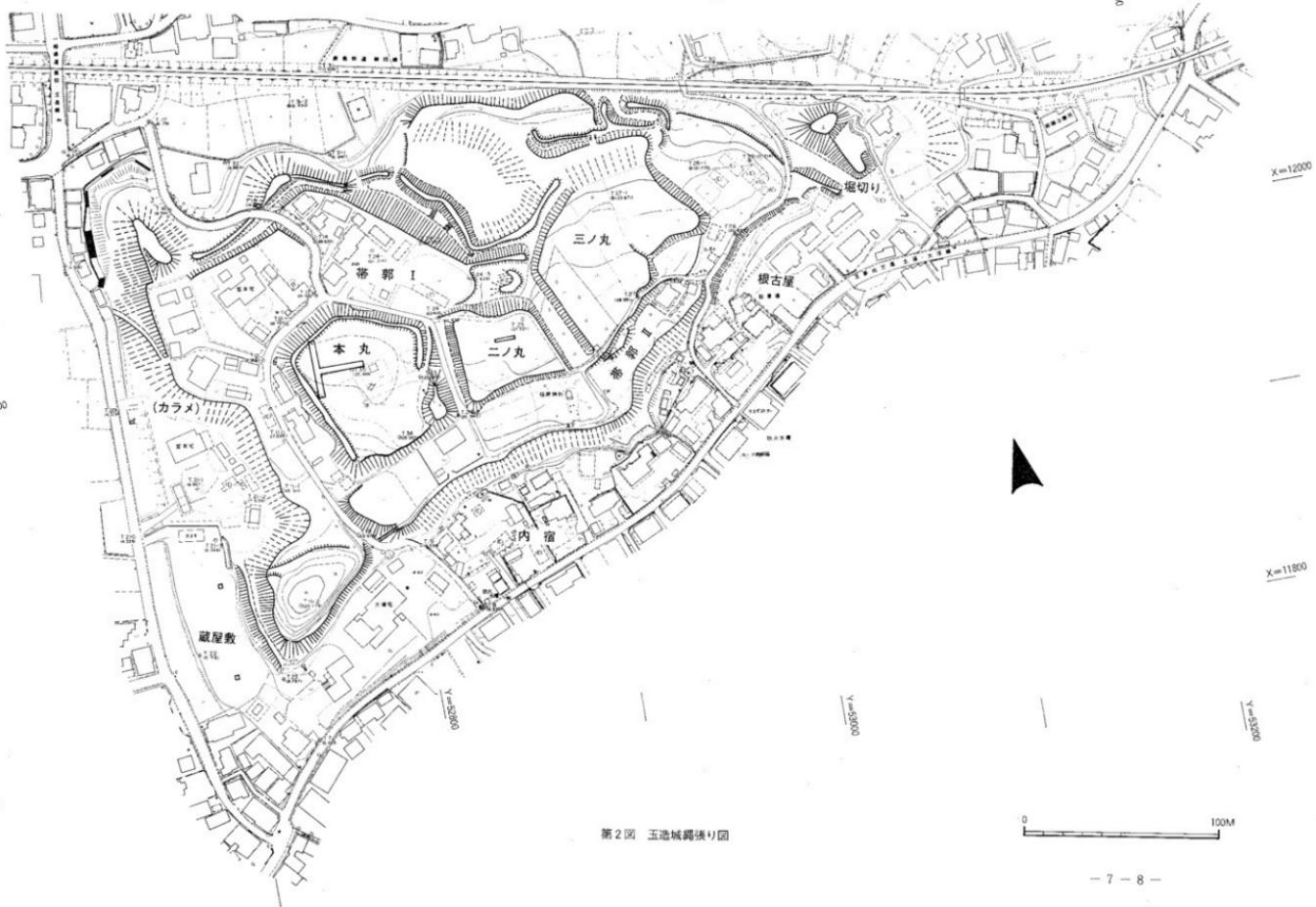
尚、今後予測される玉造城・大場家関連の保存整備計画の便を企てる為、主郭内に第IX系直角座標を7ヶ所に設置している。ベースはX = 11,993を通したが三の丸は北へ10m移動した。

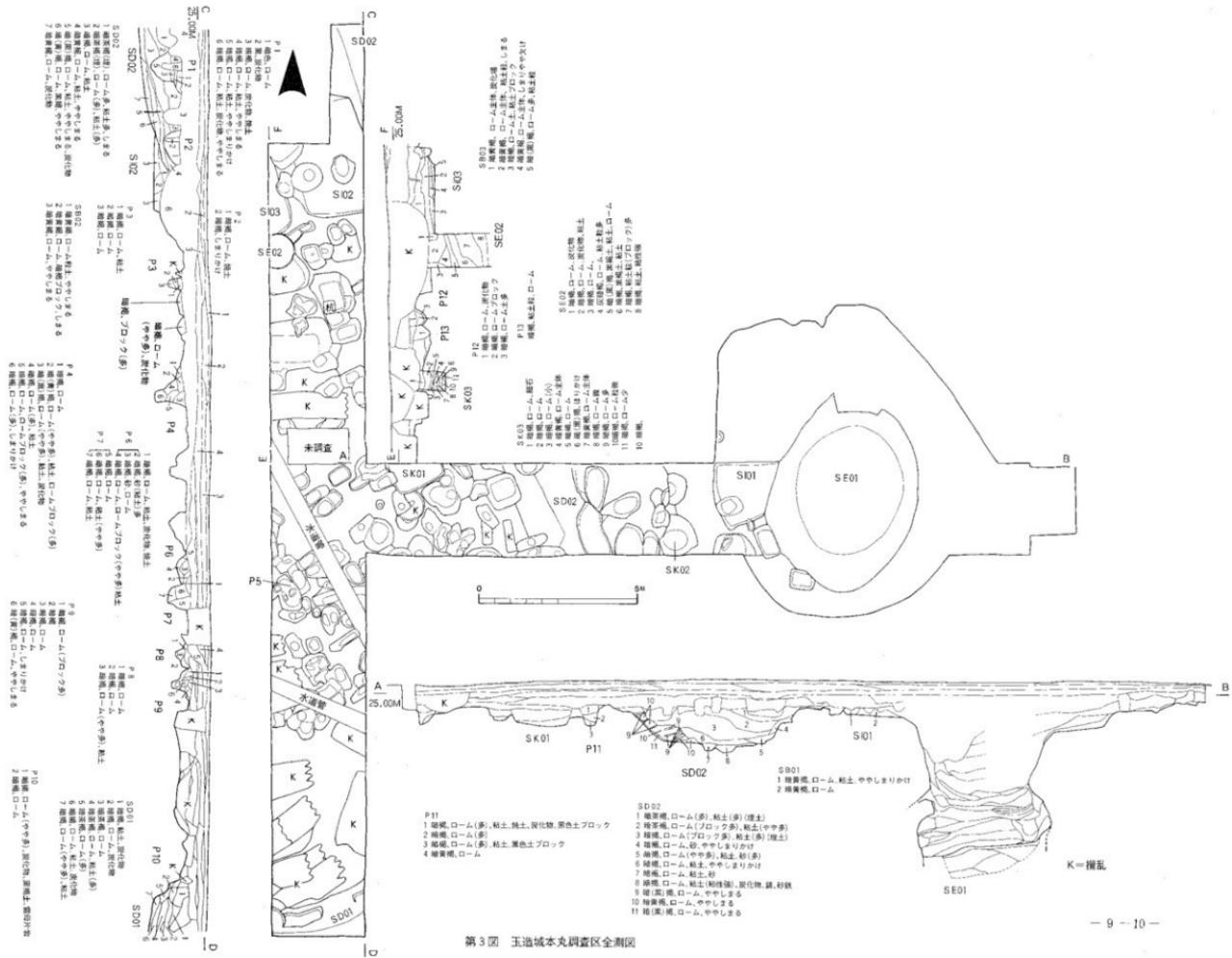
X = 11,993、Y = 52,800、H = 25.548	本 丸
X = 11,953、Y = 52,800、H = 25.305	
X = 11,993、Y = 52,820、H = 26.791	
X = 11,993、Y = 52,850、H = 27.449	二の丸
X = 11,993、Y = 52,880、H = 27.785	
X = 12,003、Y = 52,880、H = 27.416	
X = 12,003、Y = 52,930、H = 27.797	三の丸

(2) 本丸の遺構

a. 区画溝（SD 01・02、第3図、図版5）

今回の調査対象となった区域は、本丸（約3,450 m²）内の北西1/4区画程にあたっており、本丸北西コーナー部を区画したと考えられる二本の溝を検出している。この内SD 02はBトレンチ中程からN-24°-Wの方位でAトレンチ拡張部へほぼ一直線に繋る。溝幅（第2次）は4.0m、確認面からの深さ1.2m、底幅2.6mを測る。土層断面の観察によると一度改修された跡が窺われ、第1次の底直上より常滑甕片（第11図-62）が出土、鉄滓（鉄成分）も多く検出されているが、溝底部の浅い堀込みは總てこの鉄成分を取り除いた痕跡である。SD 02西岸立ち上がりには版築状に土が積まれており、最上面には粘土を貼りついている。柵列状の構造物があったものと思われるが、確実にSD 02第2次に伴うビットは未検出である。またAトレンチの南界で西へ折れており、恐らくSD 01と接続すると考えられる。SD 01はBトレンチ南端において北岸部分のみを検出、深さは1.2mを測る。溝の走行からみてSD 02に繋ると思わ





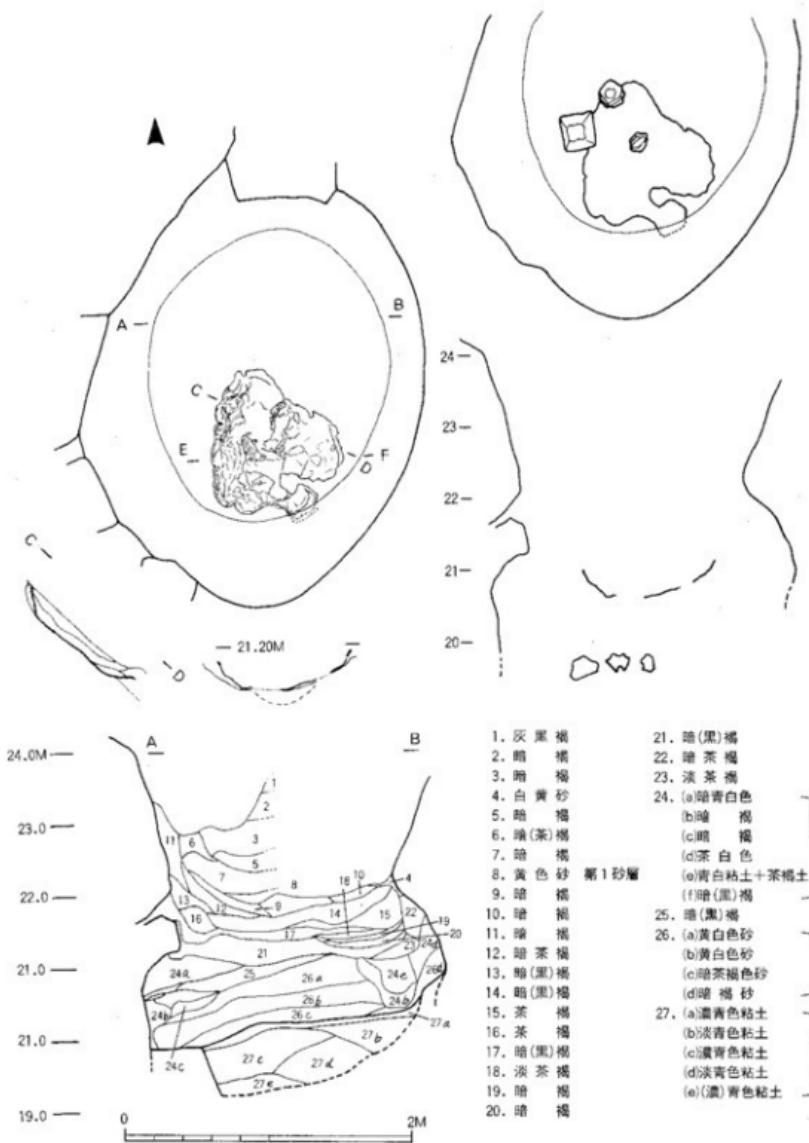
れるがSD 01の覆土は自然堆積の様相を呈するのに対してSD 02のそれは人為的埋土である点は注意を要しよう。このことは両溝出土の遺物にも反映するものと思われるが、SD 01・02の新旧関係は不明であり、同時代性もまったく否定し得るものではない。両溝を区画溝として扱ったのは、SD 02の走行方位にSD 02西岸ブロック建物群の主軸が規制されていることに拠った。

b. 井戸（SE 01、第3・4図、図版3・4）

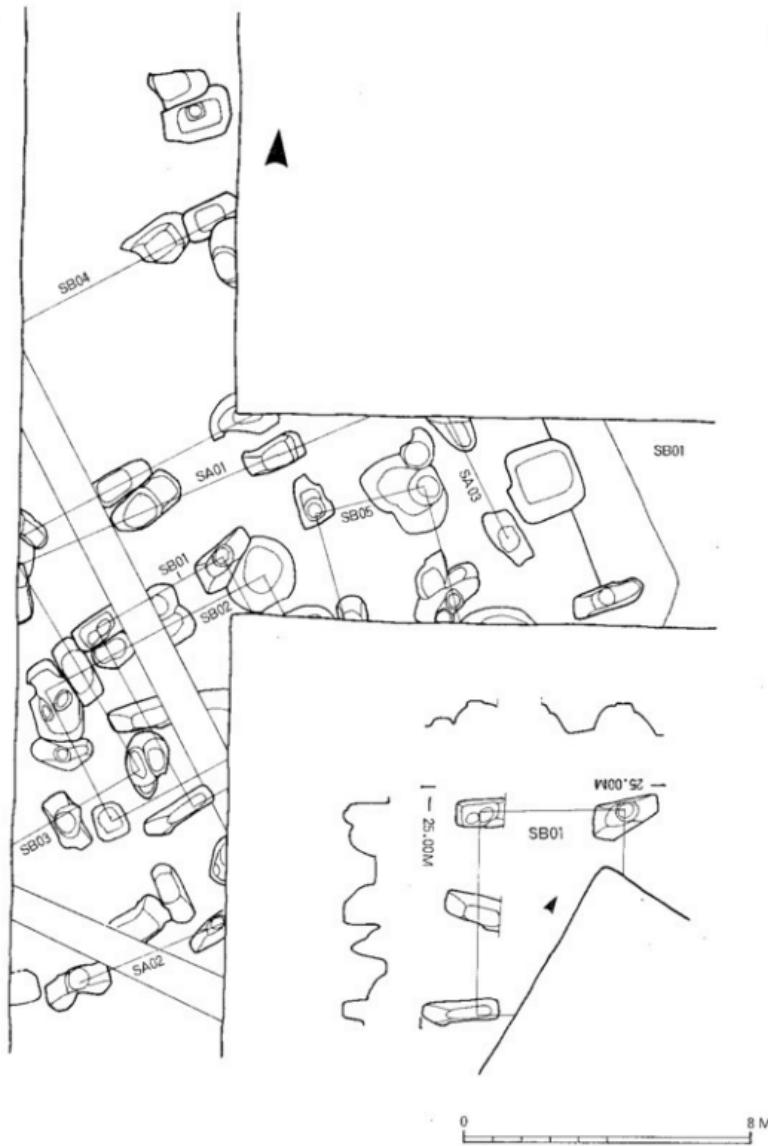
SE 01はSD 02の東岸に位置しており、長軸6.0m、短軸4.0mの卵形を呈し、主軸方位はN-9°-Eである。最狭となるのは標高22m付近の青白粘土層と成田砂層の境の部分で、同軸方向に4.1×3.4mと規模を減じる。上層部の覆土は二度の崩落により不詳である。排土作業は困難を極め、約6mを掘り下げたが安全確保のため同一深度においても完全に排土はしておらず、井戸本来の完掘には至っていない。SE 01は第1砂（8）層と第2砂（26a～d）層によりその機能時期を二時期に分けて捉えることが可能である。第2砂層下の濃青色粘土（27a～e）層はSE 01第一期の底面に張り込まれた粘土層で両側壁際にみられる粘土（24a～f）層とともに成田砂層への漏水を防ぐ役目を果たしており、本址が主に溜井戸として機能していたことを示している。第2砂層は井戸内の成田砂層が崩落堆積したものであるが、側壁粘土の崩れと砂の量からみてかなり長期間この状態で開口していたことが分かる。しかし、23層から上層は人為的埋土の様相が強く、第1砂層期再機能したもののそれ程の時間差もなく埋没したものと思われる。出土遺物はその殆どが第2砂層から上の遺物で第2砂層は殆ど遺物を含んでいない。この砂層上面から多量の鉄残滓塊がノロや溶着土器片などを伴って2×1.8m程の範囲に固着状態で検出されている。

この鉄滓塊は出土状態からみて鍛冶廃滓を井戸の南側から一気に流落させたものと思われる。ほぼ均一な厚み（1～2mm）で拡散した様子が窺え、縁の部分は1～2cmと厚みを増す。濃青粘土層からは、五輪塔（PL 12-1）笠石（火輪）1点と宝鏡印塔（PL 12-2・3）笠石2点も検出しており、土師質土器・皿（PL 7-34）もこの層位より出土しているが土器類はこの他には殆どみられない。SE 01からはこの他に古瀬戸瓶（PL 8他）、天目茶碗をはじめとする国产陶器、中国元明朝の磁器類、瓦器、鉄製品、古錢、石臼等が出土している。これ等は1～25層中に検出されたものが殆どである。27層部も完掘された訳ではなくこれより下層の状態は不詳である。

SE 01検出の鉄滓塊（第一期）とSD 2最下層（第一次）出土の鉄滓は両遺構の極近辺に鍛冶・精錬に関わる工房址の存在を予測させる。また27層中出土の石塔類は城内に寺域を持ったと考えられる旧永幸寺と玉造城との関係を知る手掛りとして重要である。



第4図 本丸井戸(SE01)実測図



第5図 本丸・掘立柱建物(SB01~03)、横列(SA01~03)配置図

c. 挖立柱建物跡（SB 01～05）・柵列（SA 01～03、第5図、図版5）

Aトレントは水道管やパワーショベルによる搅乱密度の高い部分で、当初遺構の確認は困難と思われたが、幸いにもSD 02西岸の建物群を検出することが出来た。掘立柱建物及び柵列は凡そ12m四方の枠組の内に収まるものと思われ、建物等の並びはSD 02に規制されている。SB 01は唯一建物の規模を確定でき梁行2.1m、桁行2.8mを測る1×2間の建物跡で、主軸方位はN-27°-Wをとる。SB 04はSB 01と同規模の建物で並列して同時期に存在したものと思われる。この2棟を取り囲むように柵列SA 01～03を想定したが、SA 01・03の一部のピットは建物として吸収される可能性も残している。この他に2×3間（3.4×5.4m）規模と思われるSB 03・05、2×2間（3.6×3.2m）の縦柱とみられるSB 02が認められ、SB 02（旧）→SB 01（新）あるいはSB 02とSB 03が交錯することから少なくとも三時期の建替えがあったものと考えられる。比較的小面積の内に後述する方形竪穴遺構と合わせて小規模な建物群を集めた構成となっているところがSD 02西岸ブロックの特徴とみることができよう。これらの建物群の柱穴は、長軸0.8～1.1m短軸0.3～0.5mを測る長方形ピットである。

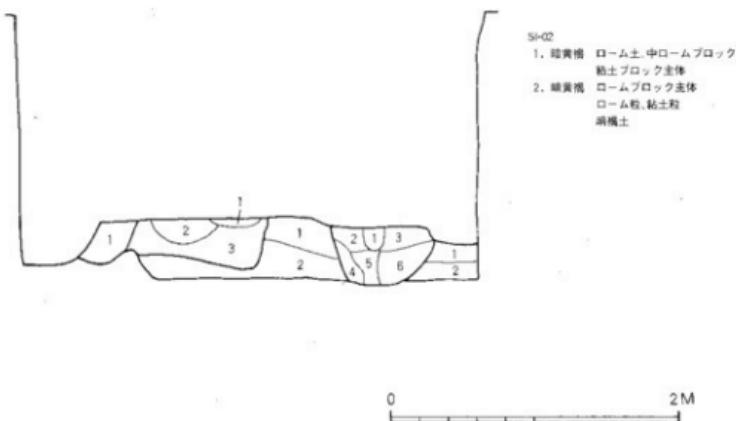
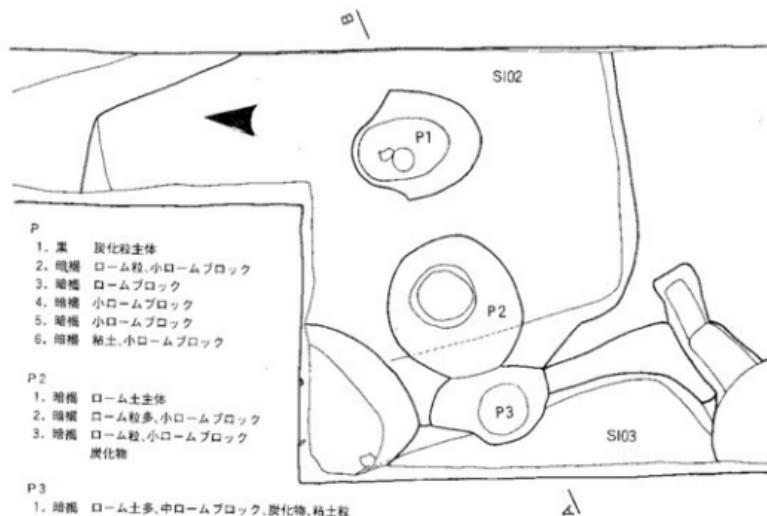
d. 方形竪穴遺構（SI 02・03、第6図、図版5）

SI 02・03はSD 02西岸部の掘立柱建物群の北側に位置する。SI 02の規模は東西3.8m、南北の残存長は2.6mを測る。パワーショベルによる搅乱が深く入り込んでおりAトレント北側の遺構検出状況を解りにくいものにしている。SI 02（旧）→SD 02（新）の重複関係が認められ、住居の東辺は大きく削平される。遺構の傾きはN-17°-Wであり、SI 03が軒を重ねるようにして西側に位置している。これ等竪穴遺構は掘立柱建物群とともにSD 02西岸地区において比較的小規模な居住区を構成している。両遺構に直接伴う遺物は検出されていない。

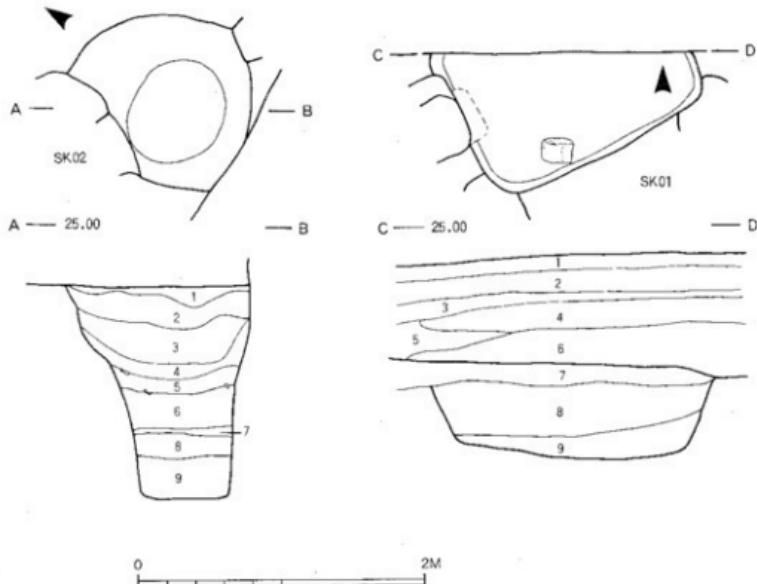
e. 土坑（SK 01・02、第7図、図版5・6）

SK 01はSD 02西岸部SB 04の北に位置しており、遺構の半分は調査区外となる。規模は東西長1.7mを測る。本址は主軸方位をN-67°-Eとするが、これがSD 02及びその西岸地区における方位の規制の中にあることは明らかであり、掘立柱建物群との関連性が十分に考えられる。本址の覆土下層は厚い炭化物層で山められており、底面及び側壁部が被熱のため赤化することから中世城館址に比較的よくみられる火葬墓と思われるが、人骨・骨粉は検出されておらず火葬墓と断定することも難しい。また主軸方向が建物群のそれと同じであることに加えて、SA 03（旧）→SK 01（新）の関係が認められる。火熱を受けた礫片が一点検出されている。

SK 02はSD 02の東側立ち上がりに掘り込まれた円形の土坑で最大径1.2m、底径0.6mを測る。SD 02の埋土を切り込んでおり、覆土中層より志野丸皿（PL 9-68）を出土している。



第6図 方形堅穴遺構(SI02,03)実測図



SK02

1. 灰暗褐色 ローム粒
2. 脱 残 塵化物、粘土、小ブロックローム粒
ロームブロック、焼土粒、砂粒
3. 暗 橙 黏土ブロック小、炭化物、焼土粒、砂粒
小ロームブロック、ローム粒
4. 黒 橙 砂粒、焼土粒、粘土粒、小ローフブロック
粘性、締り強
5. 淡灰暗褐色 ローム粒、粘土粒、粘性、締り強
6. 灰 橙 炭化物、小ロームブロック、粘土粒
粘性、締りやや強
7. 黒色土 粘性有、焼土粒多
8. 灰 橙 ローム土多、小ロームブロック、焼土粒、炭化物
9. 暗 橙 粘性有、締り強、小ロームブロック

SK01

1. 表 土
2. 寸 土
3. 灰黒褐色
4. 灰黑褐色
5. 灰黑褐色
6. 灰黑褐色
7. 暗 橙 ロームブロック、小ブロック、炭化物、焼土
8. 脱 残 ローム粒、小ロームブロック多、炭化物、灰
焼土、粘土粒
9. 黑 土 炭化物、焼土粒、焼土

第7図 本丸・土坑(SK01-02)実測図

(3) 本丸出土の遺物

a. 土師質土器・皿 (第8~10図、第1~4表、図版7)

主にSE01出土の遺物であるが実測可能な個体はほぼ掲載している。成形上の特徴は36を除いて総て回転糸切り放しであること、ケズリ調整は基本的には施さないと云う二大原則に留意しながら、以下法量の面からI~IV類に分け器形や口高比などをもとに各々細分する。

I a類——口径5.4~6.8cm、I a類は体部が内側気味に開く1・2・12~14。

I b類——口径5.7~6.3cm、体部はほぼ直線的に短かく開くもの—3~8・11。

I c類——口径6.2~6.8cm、体部は直線的に開き、底径の大きいもの—9・10・15。

II a類——口径6.8~7.9cm、体部は直線的か反り加減で口高指数27前後のもの—16~23。

II b類——口径7.3~8.1cm、器高は2.5cm強で口径の割に見込みの深いもの—24・28。

II c類——口径7.5~7.8cm、体部は直線的に器肉を減じて開き口縁端部が尖—25~27。

II d類——口径8.4~8.7cm、II cに比べて口縁部が厚く口径の若干増すもの—29~30。

III a類——口径9.4~10.0cm、体部はほぼ直線的に開き口縁部が肥厚するもの—31~35・37。

III b類——口径11.1~11.8cm、体部に若干の張りをもって開き糸切痕は左回転—49~51・54~57。

III c類——口径10.0~11.4cm、口高指数25前後—38~41・47・52~55。

IV a類——口径10.1~10.9cm、III類に比べて見込みの深いIII—42・45・46・48。

IV b類——口径10.2~11.4cm、器肉が薄く多条の水挽痕を観察できる—43・44・53・56。

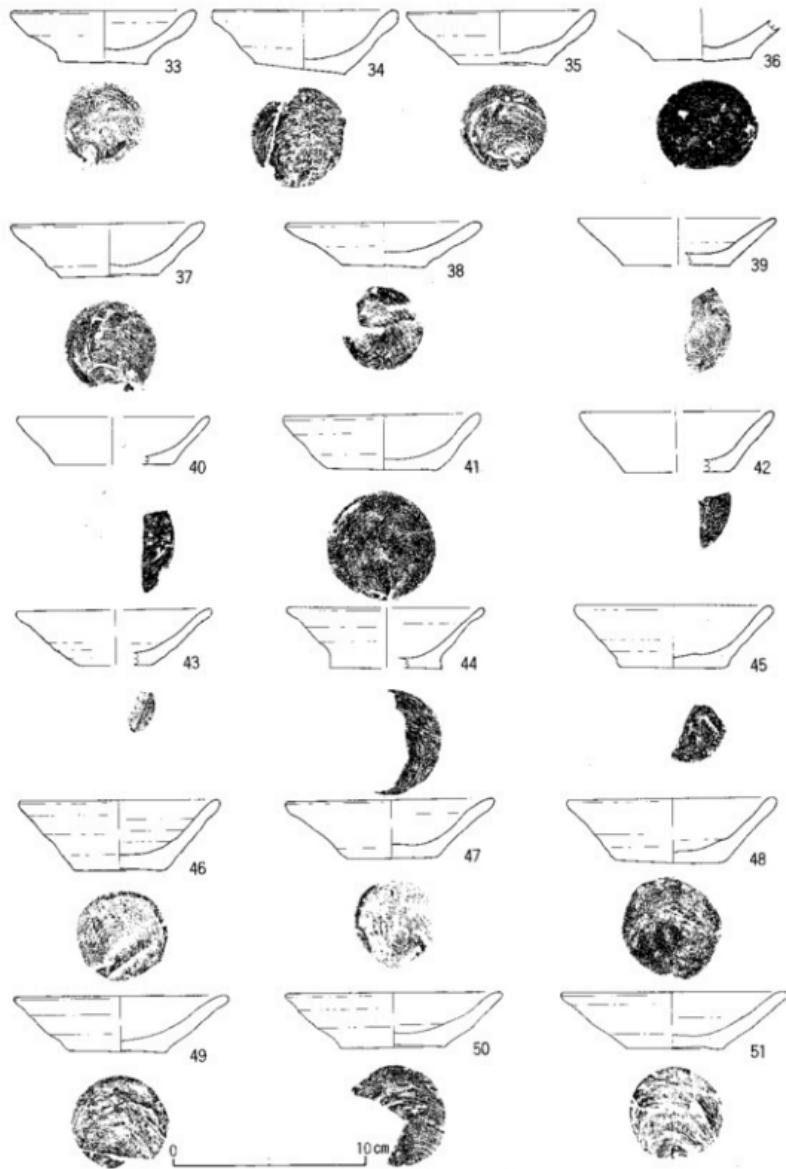
IV c類——口径13.1~13.4cm、IV b類の一回り大型のもの—58~59。

b. 陶磁器 (第11図、第4表、図版8~10)

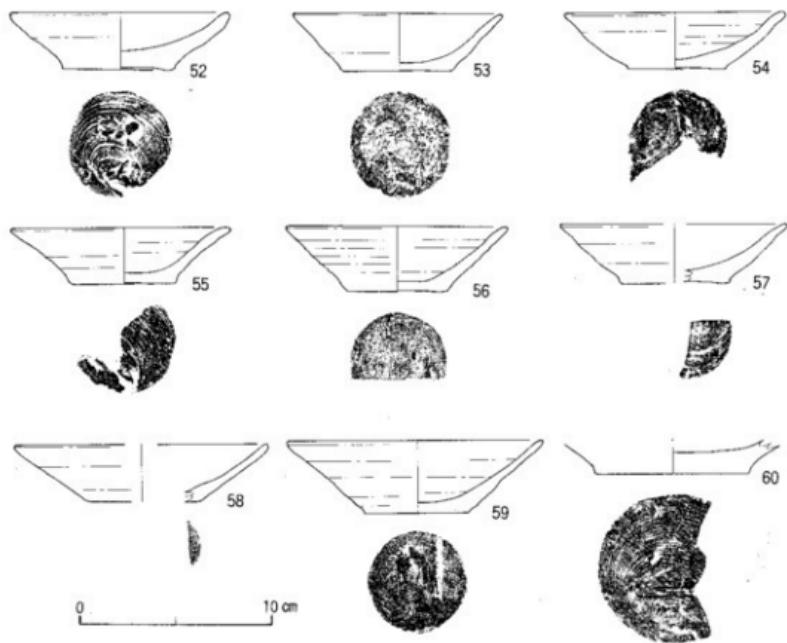
61は古瀬戸灰釉瓶子である。底径は8.7cm、最大幅は肩部にあり18.4cmを測る。丸みのある肩口から直線的に底部へいたる姿は直腰型と呼ばれる瓶子の典型である。素地は灰白色を呈し肉厚でやや無造作な巻上げ痕を残す。淡緑色の釉は流条化しており焼成の良好なことを示すが体部には釉むらが目立つ。69は青磁碗で口径12.4cm、器高4.7cm、高台径5.7cmを測る。釉は淡青色に発色するが素地は一部未還元である。70~72は磁蓮弁文碗の小片で中国龍泉窯の製品である。以上の61・69・70~72は13世紀後半~14世紀前半に位置づけられる。66は鉄釉天目茶碗である。口径は11.4cmを測る。76は常滑燒の口縁部片で縁帶は幅広で頸部に密着する。73は白磁皿、74・75は染付碗と皿である。74・75は景德鎮産で75の見込みには十字花文が配される。78は灰釉折縁丸皿で、66とともに瀬戸・美濃製品である。以上66・73~75・76・78は16世紀の前半から後半にかけての遺物である。67・68は志野丸皿で68の口径は13.2cmを測る。長石單味釉独特の肌合を有する。67はSK02、68はSE01覆土中-1mより検出している。17世紀前半に位置づけられる。



第8圖 土師質土器・皿(1)



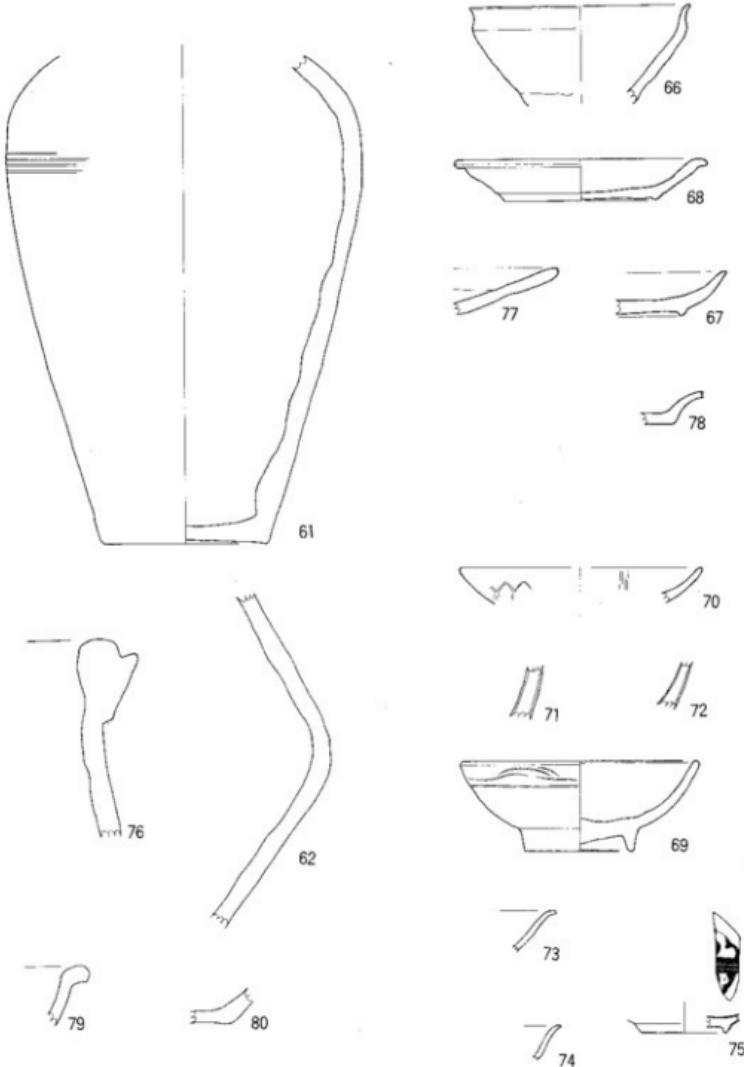
第9図 土師質土器・皿(2)



第10図 土師質土器・皿(3)

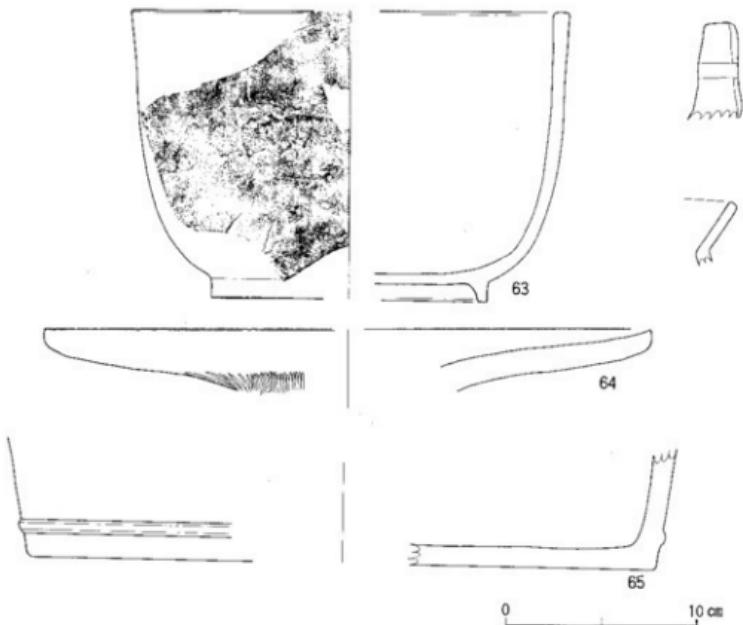
c. 瓦器・瓦質土器 (第12図、図版8・11)

63は瓦器鉢で口径22.8cm、器高15.0cm、高台径14.4cmを測る。体部は丸みをもつ腰部から垂直気味に立ち上がる。口唇部は平坦に仕上げており器厚は0.5~0.8cmとほぼ均一である。胎土は緻密で色調は煙灰黒色を呈し軽い質感である。体部外面には連続する二段の渦巻き文と菊花文がスタンプで押捺されている。64は高杯と思われ口径31.8cmを測るが、脚部を欠損するので全体的な器形は不詳である。外面とも煙灰黒色を呈し外面には從位のミガキ調整が認められる。胎土は橙褐色を呈し鉄分・砂粒を含む。手法的には平安期の黒色土器に通じるところがある。65は火鉢の底部片で推定底径は32.6cmを測り、一条の凸帯がめぐる。煙灰黒色を呈するが胎土は砂質で63とは異質な感がある。この中で明らかに瓦器と呼べるのは63のみで、64・65は在地産の模倣品といえよう。3点いずれも大型な器形を呈し焼成の最終段階で焼成処理が施されるという点で共通しているが、土師質的な仕上り(64)と瓦質的な仕上り(65)の差が生じるのは窯焚きの製品か否かの違いによるものかもしれない。aは瓦質で火鉢などの足部とも考えられる。bも煙灰黒色を呈する瓦質土器片である。



第11図 陶 磁 器

0 10 cm

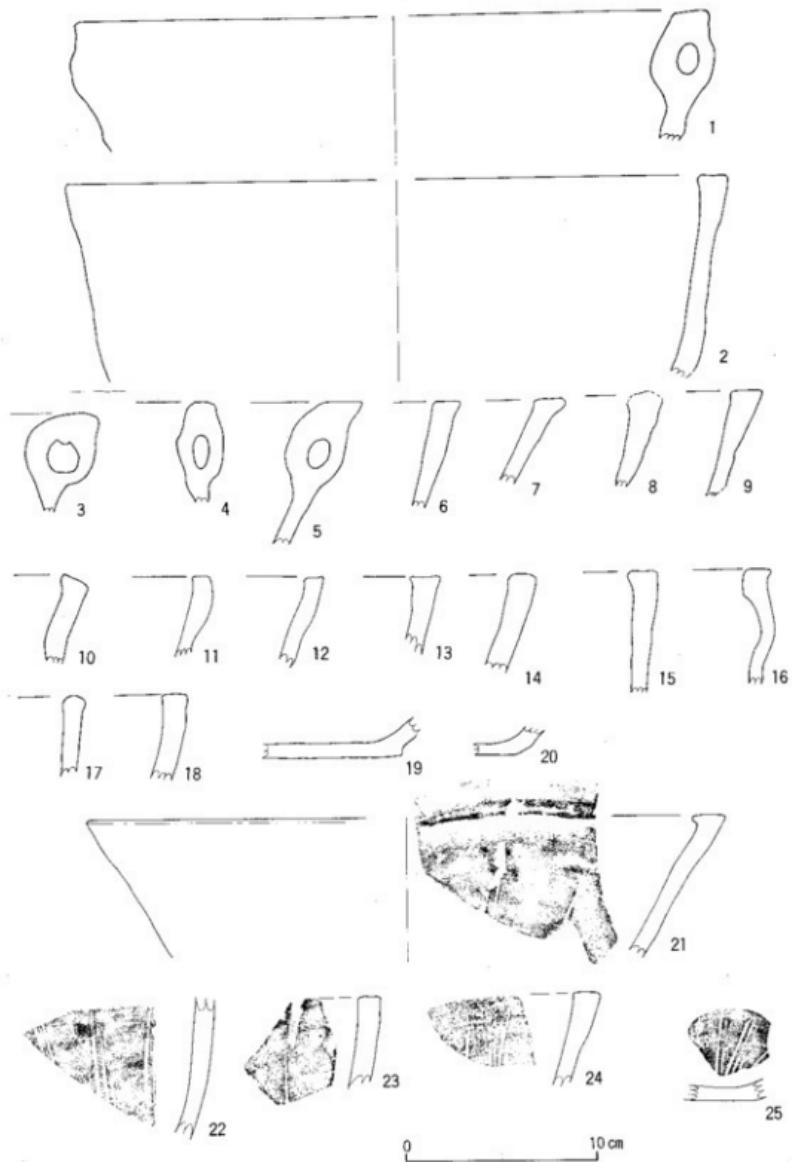


第12図 瓦器・瓦質土器

d. 内耳土器・土師質擂鉢 (第13図)

1~20は内耳土器片である。器形をとどめるものは検出されていない。口縁端部を平坦に仕上げる例が主体を占めており、11・12・18のように口縁部が肥厚しないものと、2・6~10・13・15のように肥厚するものとがある。両者とも口唇部は水平に近いナデ仕上げであり、7~9は浅く開く器形と思われる。色調は明橙色から暗橙色のものが多く比較的粘土質な胎土で、1は金雲母を多く含む。焼成はいずれも良好で外面は煤の付着が目だつ。1の推定口径は33.2cm、2は34.4cmを測る。19・20は内耳土器底部片と思われる。

21~25は器体内面に1~4条の筋目を施した土師質の擂鉢片である。21の推定口径は33.4cmを測り、1本単位の筋目が施される。水平な口づくりは内耳土器6~9などに通じるところがあり、胎土は比較的砂粒も少なく粘土質である。22は1単位4本筋目、23は1本、24が2本、25の底部片に3本筋目がそれぞれ施されており、比較的少ない筋目と間隔の粗さが目立つ。筋目はそれ程深く刻まれたものではなく、25のように磨滅のすんだものもある。いずれも胎土は粘土質で色調は暗橙色を呈する。



第13図 内耳土器、土師質壺鉢

第1表 遺物観察表

種別 番号	出 土 位 置 種 類	法量(m)	形 成 ・ 調 整	色 調 ・ 胎 土	備 考	
8 図	SE01-2 m 土 質 土 器	口径 5.4 器高 1.5 底径 2.7	ロクロナデ 体部内側斜傾に開く	体部外面下端無調整 底面回転系切り	黄褐色 粘土質大粒砂粒	完形
1	SE01-3 m 土 質 土 器	6 = 1.7	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	棕褐色	完存率90%
2	— 土 質 土 器	4.1 = 1.4	ロクロナデ 体部や直線的に開く	回転方向(右) 底面回転系切り	粘土質	—
3	— 土 質 土 器	6.7 = 1.4	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	棕褐色	完形
4	SE01-2秒上層 土 質 土 器	6 = 1.8	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	黄褐色	完存率60%
5	— 土 質 土 器	5.7 = 1.6	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	砂粒・雲母	完存率60%
6	— 土 質 土 器	5.9 = 1.7	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	砂粒・雲母	完存率25%
7	S D O 2 土 質 上 器	5.9 = 1.9	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	棕褐色	完形
8	SE01-1 m 土 質 土 器	6.2 = 1.5	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	砂質	完存率25%
9	— 土 質 土 器	6.2 = 1.3	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	棕褐色	完存率10%
10	SE01-6 m 土 質 土 器	6.4 = 1.2	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	棕褐色	完存率30%
11	SE01-2 m 土 質 土 器	6.3 = 1.7	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	砂質	完存率30%
12	SE01-2 m 土 質 土 器	6.3 = 1.9	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	棕褐色	完存率25%
13	表 案 土 質 上 器	6.5 = 2.0	ロクロナデ 底部厚	体部外面下端無調整 底面回転系切り	砂質	完形
14	P. 15 土 質 土 器	6.8 = 1.7	ロクロナデ アリ痕	体部外面下端無調整 底面回転系切り	棕褐色	完存率95%
15	SE01-2 m 土 質 土 器	6.8 = 1.5	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	砂粒・雲母	完存率25%
16	P ヌ 土 質 上 器	7.0 = 1.7	ロクロナデ 底部厚	体部外面下端無調整 底面回転系切り	棕褐色	完存率60%
17	SE01-2秒上層 土 質 土 器	6.8 = 1.9	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	砂粒・雲母	完存率50%
18	SE01-4 m 土 質 土 器	6.8 = 1.8	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	黄褐色	完存率30%
19	SE01-2秒上層 土 質 土 器	6.8 = 2.1	ロクロナデ	体部外面下端無調整 底面回転系切り	砂質	完存率60%
20	P. 25 土 質 上 器	6.9 = 2.0	ロクロナデ 板状压痕	体部外面下端無調整 底面回転系切り	棕褐色	完存率50%
		4.2	体部直線気味に開く	回転方向(不明)	砂粒・雲母	—

第2表 遺物観察表

発現番号	出土位置	法量(0m)	形・成・調・整	色調・胎土	備考	
21	上部質土器	口径7.4 器高2.0 底径4.2	クロナデ 体部外反気味に開く	体部外面下端無調整 底部回転系切り	橙褐色 粘土質	完存率80%
22	上部質土器	7.1 × 2.0 4.5	クロナデ 体部や外反気味に開く	回転方向(右) 底部回転系切り	砂質 橙褐色	完存率25% 透明度
23	P ル	7.9 × 1.8 4.4	クロナデ 体部外端に開く	回転方向(不明) 底部回転系切り	砂質 橙褐色	完存率30%
24	上部質土器	7.3 × 2.6 3.9	クロナデ 一条の強い水挽痕	体部外面下端無調整 底部回転系切り	粘土質 橙褐色	完存率25%
25	S D 0 1	7.5 × 2.2 4.1	クロナデ 体部直線的に開き、口唇でやや内斂する	回転方向(左) 底部回転系切り	砂質 橙褐色	完形 透明度
26	S E 0 1 - 2 m	7.8 × 2.3 4.5	クロナデ 底部厚	体部外面下端無調整 底部回転系切り	砂質 橙褐色	完存率60%
27	P 4 2	7.5 × 1.8 4.2	クロナデ 体部直線的に開く	回転方向(左) 底部回転系切り	砂質 橙褐色	完存率30% 透明度
28	S D 0 2	8.1 × 2.7 5.7	クロナデ 底部やや丸みを持つ	体部外面下端無調整 底部回転系切り	砂質 橙褐色	完存率40%
29	S D 0 1	8.4 × 2.3 4.5	クロナデ 体部直線的に開き、口唇でやや内斂する	回転方向(右) 底部回転系切り	砂粒・墨母 橙褐色	完形
30	P ハ	8.7 × 2.2 6.0	クロナデ 体部直線的に開き、口唇でやや内斂する	回転方向(右) 底部回転系切り	砂質 黄褐色	完存率40%
31	S E 0 1 - 3 m	9.4 × 2.6 4.1	クロナデ 体部直線的に開く、体部肥厚	回転方向(不明) 底部回転系切り	砂粒・墨母 橙褐色	完存率25%
32	SE 0 1 - 2 等上層	9.4 × 2.9 4.6	クロナデ 一条の強い水挽痕	体部外面下端無調整 底部回転系切り	砂質 橙褐色	完存率80%
33	S E 0 1	9.7 × 2.7 4.7	クロナデ 体部や内斂気味に開く、器体肥厚	体部外面下端無調整 底部回転系切り	砂粒 橙褐色	完形
34	S E 0 1 - 6 m	9.7 × 3.1 4.8	クロナデ 体部直線的に開く、一条の強い水挽痕	回転方向(右) 底部回転系切り	砂粒 橙褐色	完存率60% 透明度
35	S E 0 1 - 2 m	9.9 × 2.8 4.8	クロナデ 体部直線的に開く、一条の強い水挽痕	回転方向(右) 底部回転系切り	砂粒 橙褐色	完形
36	S D 0 2	- (2.1)	クロナデ 底部直線的に開く、底部やや肥厚	体部外面下端無調整 底部回転系切り	砂粒 黄褐色	底部 粘土質
37	上部質土器	10.0 × 2.8 5.0	体部ほぼ直線的に開く 一条の強い水挽痕	回転方向(右) 底部回転系切り	砂粒・鉄分 黄褐色	完存率70%
38	S E 0 1	10.3 × 2.3 4.4	クロナデ 体部や外反気味に開く	体部外面下端無調整 底部回転系切り	砂粒・鉄分 黄褐色	完存率50%
39	K	10.5 × 2.5 5.5	クロナデ 体部直線的に開く	回転方向(右) 底部回転系切り	砂粒・鉄分 粘土質	完存率25%
40	S D 0 1	10.0 × 2.5 5.2	クロナデ 体部直線気味に開く	体部外面下端無調整 底部回転系切り	砂質 黄褐色	完存率20% 透明度

第3表 遺物観察表

種別 番号	出 土 位 置 種 類	法量(m)	形 成 ・ 調 整	色 調 ・ 胎 土	備 考	
41	S D O 2 目 土 質 貨 土 器	口径10.3 高さ2.8 底径5.6	ロクロナデ 体部や内側気味に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(右)	焼褐色 砂粒・雲母	完存率90% 埋明皿
42	S E 0 1 里 土 質 貨 土 器	10.1 3.2 5.5	ロクロナデ 体部ほぼ直線的に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(不明)	砂粒・雲母	完存率25% 埋明皿
43	K 里 土 質 貨 土 器	10.2 2.9 3.9	ロクロナデ 板状厚膜	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 黄褐色	黄褐色	完存率25%
44	S D O 1 里 土 質 貨 土 器	10.3 3.2 5.8	ロクロナデ 板状压痕	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 淡黄褐色	淡黄褐色	完存率70%
45	SE 01. - 3 m 目 土 質 貨 土 器	10.4 3.3 5.7	ロクロナデ 体部直線的に聞く、体部や内側気味に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(右)	砂質	完存率25%
46	SE 01. - 2秒下層 里 土 質 貨 土 器	10.5 3.7 4.7	ロクロナデ 体部直線的に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(右)	砂質	完存率60% 埋明皿
47	K 里 土 質 貨 土 器	10.9 3.0 4.5	ロクロナデ 体部ほぼ直線的に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(右)	焼褐色	完存率50%
48	SE 01. - 3 m 里 土 質 貨 土 器	10.9 3.3 5.6	ロクロナデ 体部ほぼ直線的に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(不明)	砂粒、鐵分	完存率60%
49	S D O 1 - 4 m 里 土 質 貨 土 器	11.1 2.9 5.0	ロクロナデ 体部や内側気味に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(左)	黃褐色 鐵分、粘土質 砂粒(大粒)	完存率95% 埋明皿
50	SE 01. - 1秒下層 里 土 質 貨 土 器	11.3 2.9 5.4	ロクロナデ 体部や内側気味に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(左)	黃褐色 鐵分、粘土質 砂粒(大粒)	完存率70%
51	S E 0 1 里 土 質 貨 土 器	11.8 2.9 5.1	ロクロナデ 体部や内側気味に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(左)	明褐色 鐵分、粘土質 砂粒(大粒)	完存率65%
52	P 里 土 質 貨 土 器	11.3 3.0 5.6	ロクロナデ 体部ほぼ直線的に聞く、底部肥厚	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(右)	粘土質	完存率80% 埋明皿
53	S D O 1 里 土 質 貨 土 器	10.9 3.0 5.7	ロクロナデ 体部ほぼ直線的に聞く、器體薄い	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(不明)	淡黄褐色 砂粒、鐵分	完存率60%
54	SE 01. - 2 m 里 土 質 貨 土 器	11.5 2.9 5.1	ロクロナデ 体部や内側気味に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(左)	黃褐色 鐵分、砂粒(大粒)	完存率50%
55	SE 01. - 1秒下層 里 土 質 貨 土 器	11.4 3.0 5.4	ロクロナデ 体部や反り気味に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(右)	黃褐色 砂質	完存率30% 埋明皿
56	S K 0 2 里 土 質 貨 土 器	11.4 3.4 5.1	ロクロナデ 体部直線的に聞く、五条の強い水痕痕	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(左)	燒褐色 砂粒・鐵分	完存率60%
57	SE 01. - 3 m 里 土 質 貨 土 器	11.8 3.1 5.6	ロクロナデ 体部や内側気味に聞く	体部外面下端無調整 底部回転糸切り 回転方向(左)	燒褐色 鐵分、砂粒(大粒)	完存率20%
58	S D O 2 里 土 質 貨 土 器	13.1 3.0 5.7	ロクロナデ 体部直線的に聞く、多条の水痕痕	体部外面下端無調整 底部糸切り 回転方向(不明)	燒褐色 砂粒、鷺行多	完存率30%
59	S D O 2 里 土 質 貨 土 器	13.4 3.8 5.4	ロクロナデ 板状压痕	体部外面下端無調整 底部糸切り	燒褐色	完存率40%
60	P 3 3 里 土 質 貨 土 器	— (1.7) 8.1	ロクロナデ 体部直線的に聞く	体部外面下端無調整 回転糸切り	黃褐色 粘土質	底部

第4表 遺物観察表

序号	出 土 位 置	法量(0.m)	形 式 • 調 整	色 製 • 粒 士	考
114	S E 01 - 3m	口延 - 器高(25.4)	側に模印文あり	灰白色(胎)	
61	古瀬戸灰陶瓶	底径 8.7	外側ヨコナデ、内面隠まき上げ瓶、オサエ	淡緑色(胎)	瀬戸 14世紀前半
62	S D 02 最下層		外面背面は自然隠仄、底部トテ方向のナデ仕上げ	暗赤褐色	
常 清 大 甕			内面は横位のヘラナデ、オサエ	大粒砂粒多、鉄分	
124	S E 01 - 3m	22.8	ロクロナデ	鐵黑色	
63	瓦 質 鉢	15.1	表面荒れ、内面多方向のナデ、印花文あり、 運元焼成	砂粒少	完存率20%
64	S E 01 - 4m	14.4	ロクロナデ 横部欠損	鐵黑色	
64	瓦 質 高 环 ?	31.5	外前中央・子方向ミガキ	酸化焼成	完存率40%
65	S E 0 1	32.5	ロクロナデ	鐵分、砂粒少	完存率20%
65	瓦 質 鉢	-	内面器皿荒れ	弱還元焼成	鐵分、砂粒少量
66	S E 0 1	11.4	素地にも鐵サビで化粧かけしている	鐵釉、被褐色(胎)	瀬戸美濃
66	1秒下層 - 6m	(5.0)			大室
天 日 釜 鋼	-		鐵のアトあり	被成付	16世紀前半
67	S K 02 - 2m	-	底部に日アトあり	砂粒微量	瀬戸美濃
志 野 丸 皿	(2.3)		内面にフリモノあり、高台裏ケズリクズ付着	鐵白色(胎)	17世紀前半
68	S E 01 - 1m	13.2	口縁を土肆にある	長石鈣乳白色	
志 野 丸 皿	2.2				
68	S E 01 - 8.0			鐵白色(胎)	17世紀前半
69	S E 01 - 3m	12.4	底部を無彩にする、かなり鉄吸がせい、胎土緻密、漆原のアトあり	灰色、鐵白色(胎)	中國東方 (福建、廣東)
69	青 磁 鋼	4.7			16世紀
70	S E 01 - 2m	5.7	外側口縁下に唐草の退化した紋様を描く	淡青白色(胎)	中國龍泉窯
70	-	12.6	筋のある廉脊	灰色(胎)	13世紀後半~ 14世紀前半
70	青 磁 小 皿	(1.8)	内面にも二重沈線で区画している	青白色	14世紀前半
71	K		胎土緻密	灰色(胎)	中國龍泉窯
71	青 磁 瓶		外面縦溝弁	淡青色	13世紀後半~ 14世紀前半
72	S E 01 - 6m		胎土緻密	灰色(胎)	中國龍泉窯
72	青 磁 瓶		外面縦溝弁	淡青色	13世紀後半~ 14世紀前半
73	S E 01 - 2 ~ 4m		口縁外反させる	胎土緻密	灰色(胎)
73	白 磁 皿		口唇部に溶着痕あり、鐵アトあり		中國東方 (福建、廣東)
74	S E 01 - 2m		外部に唐草文	胎土緻密	16世紀
染 付 瓶					
75	S E 01 - 5m		内面中央部に十字花文	胎土緻密	灰色(胎)
75	染 付 皿				中國景德鎮 16世紀前半~後半
76	S E 0 1		縞帯が顶部に接着している	暗赤褐色	常滑
76	1 砂 下 層			長石、砂粒多	
常 清 大 甕			口輪、口縁に隠仄あり	隠る	16世紀
77	S E 01 - 2m		凸け掛け	黃茶褐色	瀬戸美濃
78	灰 軸 鉢			淡綠白色(胎)	
78	S E 0 1 - 2m			黃白色	瀬戸美濃
78	灰軸折縫丸皿			淡褐色(胎)	16世紀後半
79	K			黃褐色	瀬戸美濃
79	灰 軸 陶 器			淡オリーブ(胎)	18~19世紀
80	P 3 2		内面に金?	胎土緻密	種褐色(胎)
80	土 耐 質 甕		体部内面と被覆面にガラス質付着	回転糸切り	
80				回転方向(右)	粘土質

e. 印花文・刻文（第14図、図版1）

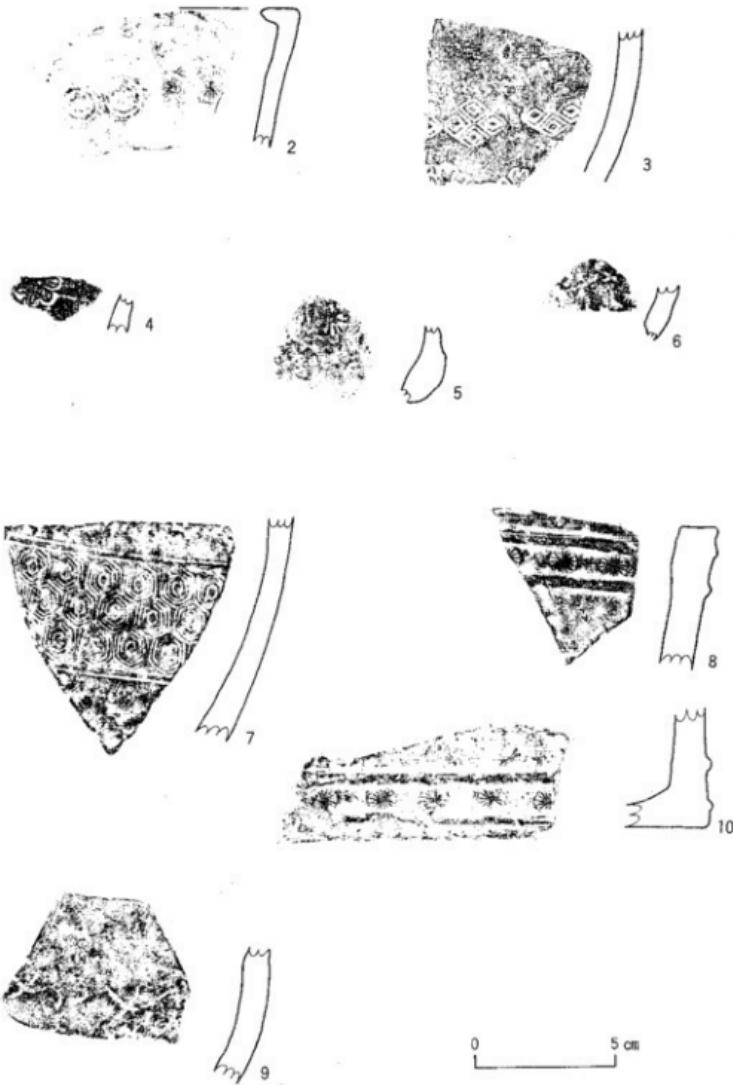
1は12図-63と同一品である。瓦器鉢で連続する渦巻文に挿まれて菊花文が押捺される。2～10は在地産の火鉢類に押捺された文様であり、器面が燐黒色を呈するものとそうでないものとがあるが、總て土師質な仕上りになっている。2は花文と星形文が2個一対で押捺される。3は連続する菱四ツ目文、4にも内帶に挿まれて菱形文が施される。5～7は梅花文・菊花文などが、8には三段の亀甲繋ぎ文がローラー押捺されている。9・10は同一個体で方形の浅鉢形火鉢であろう。上下二段に凸帯に挿まれた菊花文のスタンプ押捺が施されている。11は松葉状の刻文を施す土器片である。

f. 石塔・石臼（第15図、図版12）

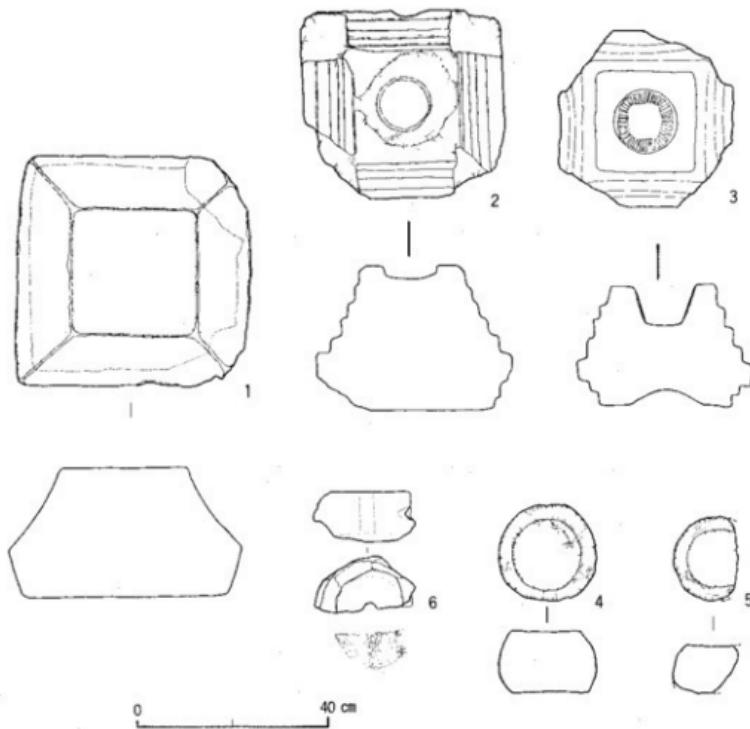
1～6はSE 01出土の遺物である。1～3は27層（PL 4左下参照）中の石塔で石質は3点とも花崗岩である。1は五輪塔の笠石（火輪）であり、高さ26.8cm、軒幅48cm、軒の厚さ10cm、上端26.4cm、下端41cmを測る。屋根はやや反り加減で石質のためかやや脆い。柄穴はない。2・3は宝瓶印塔の笠石であるが方角とも四隅の馬耳形突起（隅脚）を欠損する。2は高さ30.4cm、笠幅42cm、軒厚6cm、上端幅22.5cm、下端幅33.4cmを測り、下二段上五段の段形を呈する。上面中央部に径10.8cm、深さ約3cmの浅い柄穴が穿たれている。3は高さ24.8cm、笠幅36.8cm、軒厚4.8cm、上端幅21.8cm、下端幅27.3cmを測り、段形は下二段上四段である。上面中央には径14.4（7.4）cm、深さ8cmの柄穴を穿ち、穴の側面には縦位のキザミを施しており、下底中央には径14.6cmを測る浅いレンズ状の納受けが施されている。4・5は覆土上肩部で検出されており、相方とも真円の上下端を切りとった形で水輪か伏鉢か断定できない。石質は花崗岩である。4は高さ12.8cm、径20cm、5は高さ10cm、径17.6cmを測る。1～5各個体とも種子・銘字は見られない。6は側方挽手の上臼である。石質は安山岩で約半分を欠損しており、径約20cm、高さ10.6cmを測る。擦合せ面の溝目は1単位9～13本と不揃いで間隔もまちまちであるが、粉挽きのものに比べて浅細で臼自体小型であることから茶挽き臼と思われる。径2.8cmの供給口と四角錐状の挽棒の差し込み部分が遺存する。上面は若干の凹面を呈する。

g. 石製品（第16図）

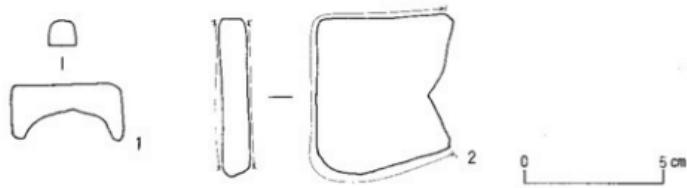
1はSE 01の第2砂層上層部から出土した砥石で材質は凝灰質砂岩である。最大幅5.6cm、厚み1.0cmを測り、両面および側辺部分に研磨痕が認められる。2はSD 02埋土中より検出されたもので石硯の一端と思われる。硯の周堤部分が節理にそって剝離したものと考えられるが、幅約4cmと小型品であり残存部の厚みからみて海部の周堤であろう。片状構造をもつやや軟質な石質で濃緑色を呈する。



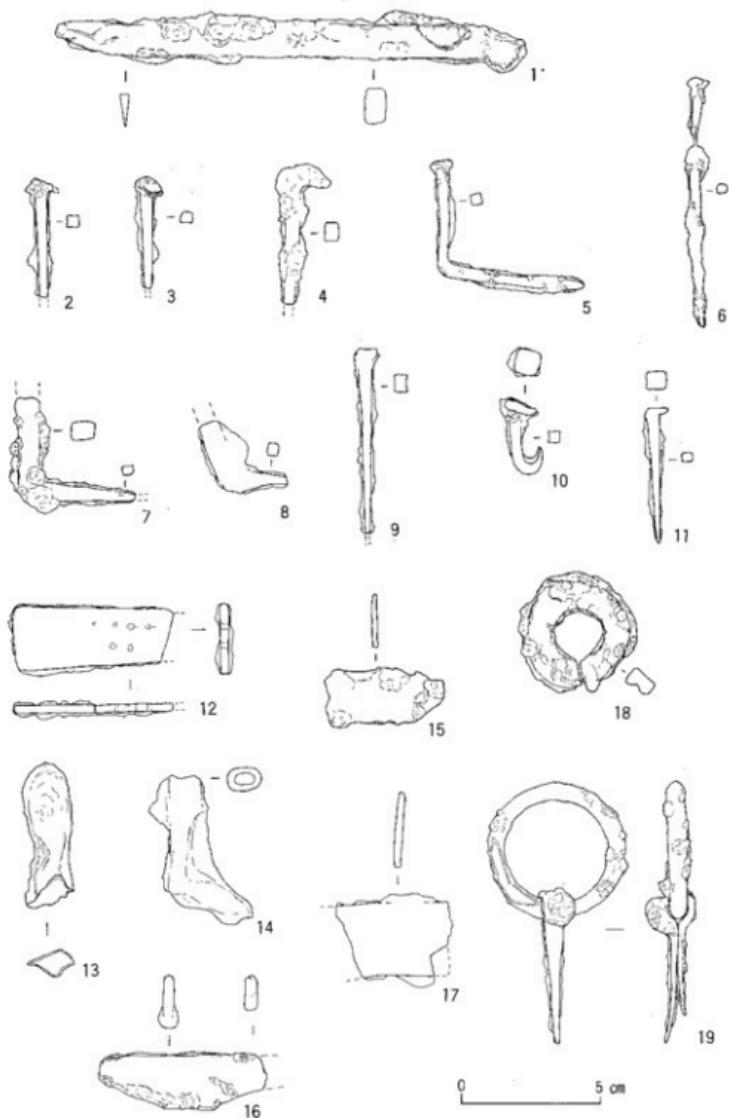
第14図 印花文・刻文



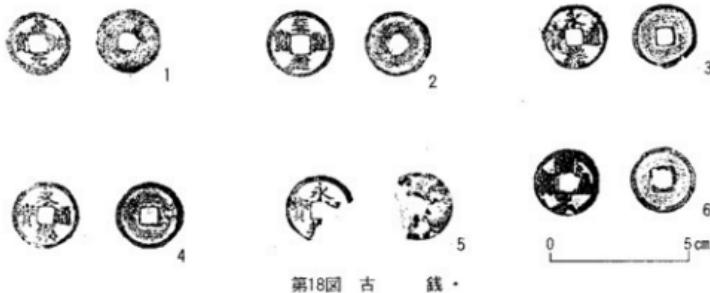
第15図 石塔、石臼



第16図 石製品



第17図 鉄 製 品



第18図 古銭。

h. 鉄製品（第17図、図版13）

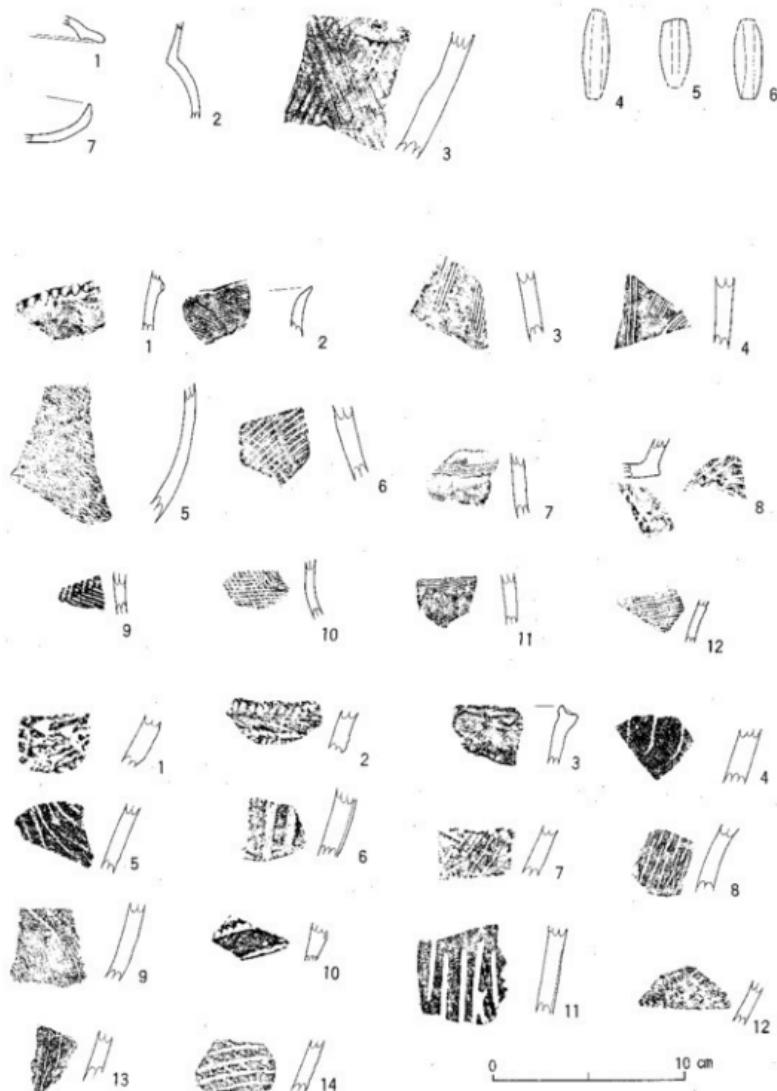
1は刀子で全長 17.0 cmを測り、刀部の厚み 0.3 cm、基部は約 0.7 cmを測る。2～11は角釘、12・15・17は小札で厚みは 0.2～0.3 cmを測る。12には6個の小孔が穿たれる。18は環状製品で径約 4 cm、厚み 0.55 cmを測る。19は掛け金具でリング部の径は 5 cm、差込み部の総長は 5.5 (4.2) cmを測る。13・14は袋状を呈する製品で13は残存長 5.3 cm、14は 6.0 cmを測り折れ曲る。16は刀子の基部と思われ、最大厚 0.4 cmを測る。10はP₃、11・12はP₁₂、7～9、13・14・17はSE 01-1～-4 mからそれぞれ出土している。他は耕作土・擾乱中の遺物である。

i. 古銭（第18図、図版14）

古銭は本丸調査区で8点を検出しているが、内2点は腐蝕がすすみ判読不能である。1は「嘉祐元寶」(北宋・初鑄 1056)でSE 01の覆土中-2 mより出土している。2は「天聖元寶」(宋・初鑄 1023)と思われ、字体は篆書体である。P⑦より出土している。3～5は「永樂通寶」(明・初鑄 1408)で、3はSE 01の覆土中-2 mより出土、4はP⑦の覆土中、5は耕作土より検出されている。6は字面が摩滅して判然としないが、「皇宋通寶」(北宋・初鑄 1039)と思われる。耕作土中の出土である。

j. その他の遺物（第19図、図版14）

縄文式土器は前・中期のものが主体である。前期の浮島式期、中期の加曾利E式期のものが目をひく。弥生式土器は1・3・4・7・11の縦区画充填連弧文、連続山形文、横走文等が施された精製土器片や縄文を施した2・5、格子目文の10などの粗製土器片があり弥生後期の所産である。この他に古墳時代前期の甕片2、後期の杯7、奈良時代の須恵器壺蓋片1などがある。



第19図 その他の遺物

IV 玉造城二の丸・藏屋敷確認調査結果

(第20~23図、PL 1・2・6・15)

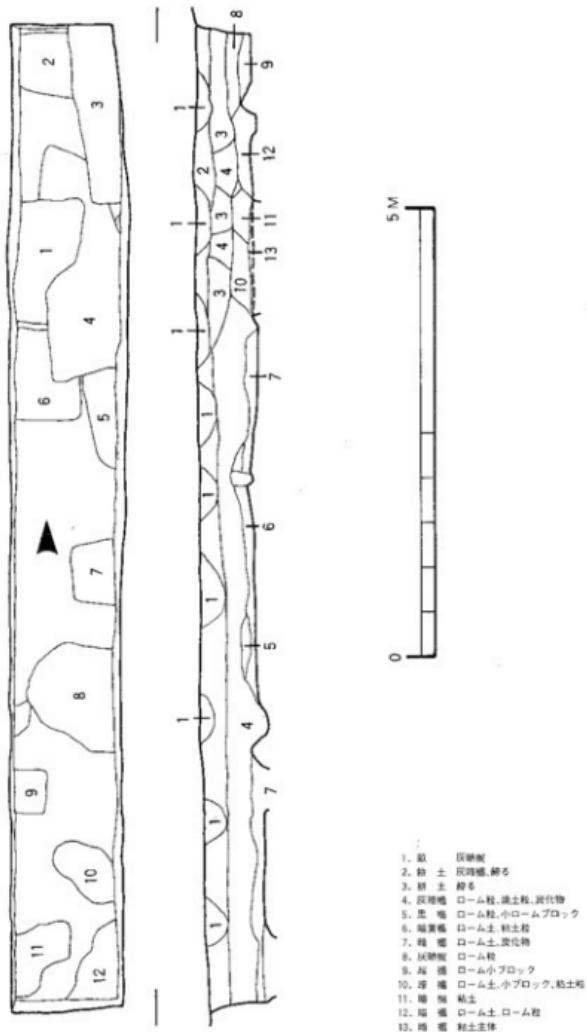
(1) 二の丸確認調査

玉造城の主郭は東西方向に3つの郭が並列された連郭式の構造をとるが、「二の丸」はその中央郭を指し空堀を挟んで西に本丸、東に三の丸が位置している。二の丸の標高は本丸に比べて2m程高くなっているが、現況は畠地となっている。郭内に土壘の痕跡はなく、北面構垣から法切りが施され竹藪となっているが、南面法切りはやや不明瞭で緩傾斜地には孟宗竹が繁る。本丸・三の丸との連絡がどのように行われていたか、また二の丸自身の虎口が何処であったか判然とはしないが、二の丸の出入口は現況で2ヶ所にあり、一つは北西コーナー部の西空堀から上がる道と、もう一本は南東コーナー部の現在は葡萄棚となっている東空堀から上がる道である。

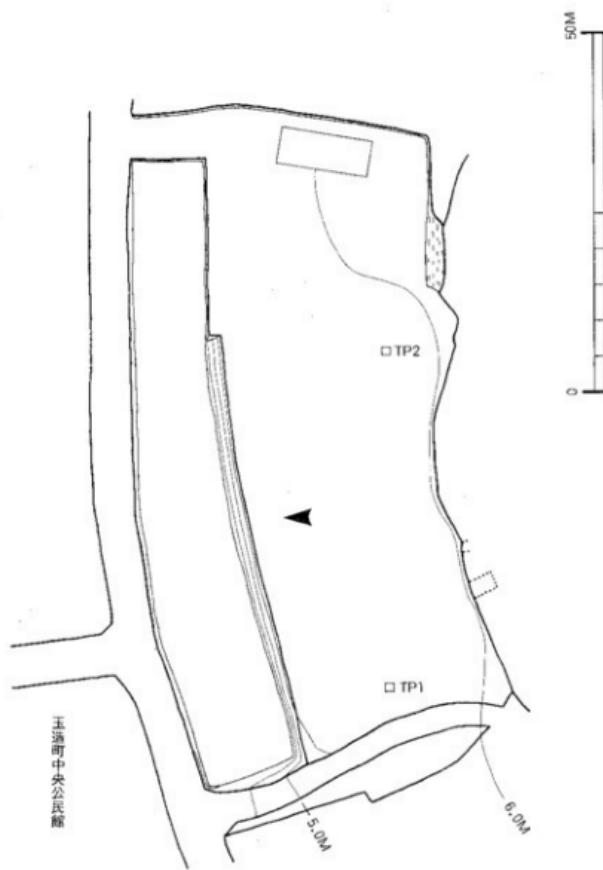
トレンチはX = 11,993、Y = 52,871を基点に座標西へ1.2 × 11mの範囲で設定、第20図のよう遺構を検出している。遺構の依存度は良好な印象を受ける。確認面までの深さは、0.5 ~ 0.6mであり本丸に比べると耕作深度も浅い。遺構はかなり重複するが玉造城関係のものが主体を占めると思われ、中でも遺構1は粘土が充填されたとみられる方形プランのピットで二の丸の遺構物を予見するに十分な構造と思われる。遺構調査を行っていないので十分なことは言えないが、本丸で検出された遺構群、特にピット群の在り方と二の丸のものは主軸も違うし規模も異なっているようである。遺物は土師質土器皿(1)、内耳土器片(2・3)、焼き締め系の甕片(4)、陶製の蓋物(5)、鉄絵の小皿片、その他古墳時代後期の遺物などが遺構確認面上層部より検出されている。

(2) 藏屋敷確認調査

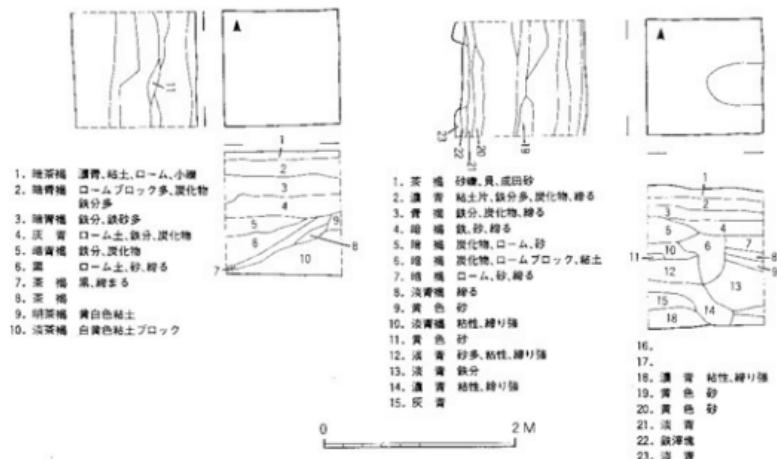
「藏屋敷」は、「玉造町字界地形図」の中に「堀ノ内」「カラメ」「根小屋」等とともに残る字名であり、本丸の南西方向へ半島のように突き出した物見台的な郭の急崖下に位置している。標高6m程の平坦地で、かつて畠地として利用されていたが現況は若木が植林されている。Y = 52,700線上に二ヶ所 1.2 × 1.2 m のテストピット(TP)を設定した。TP1は、1~4層が昭和期の整地土層で標高5.2mより下層は少なくとも江戸期以前に遡る整地層と思われる。TP2は1~10層が比較的最近の整地層とみられ、標高4.9m前後から下の土は近世の陶片を出土する。TP1の5層下の土、TP2の11層下の土は概して粘土質の土で粘性強く、よく締まる。急崖露頭にみられる粘土(自然堆積)層とは層序が明らかに異なっている。出土遺物には近世の陶器片に混じって内耳土器片(6~8)瓦質土器(9)など明らかに中世の遺物が認められ、玉造城との関連性が注目される。



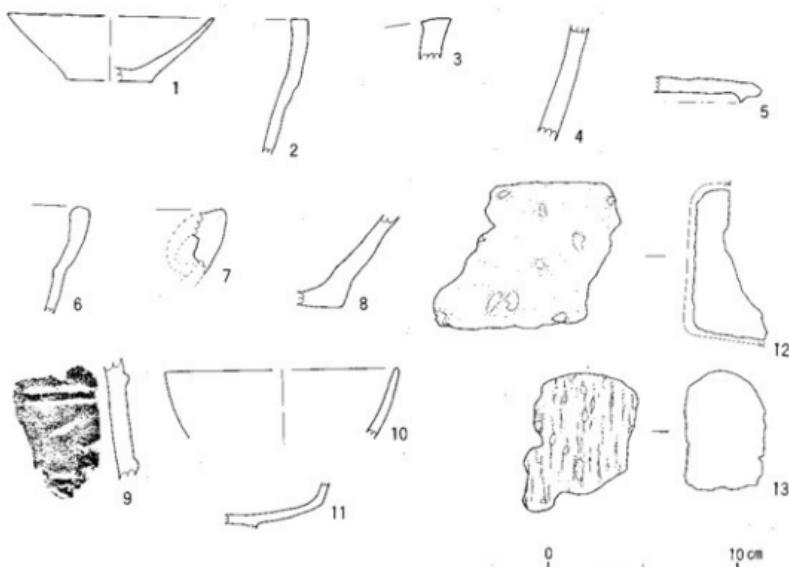
第20図 玉造城ニノ丸トレント内造構確認図



第21図 玉造城跡敷現況図



第22図 玉造城戦屋敷テストピット実測図



第23図 玉造城二ノ丸・戦屋敷出土の遺物

V おわりに (第24・25図)

玉造城の築城開始時期と城域の内に取り込まれたと考えられる旧永幸寺（元禄年間以前）の問題、更に本丸内検出の遺構と遺物について簡単にまとめておきたい。

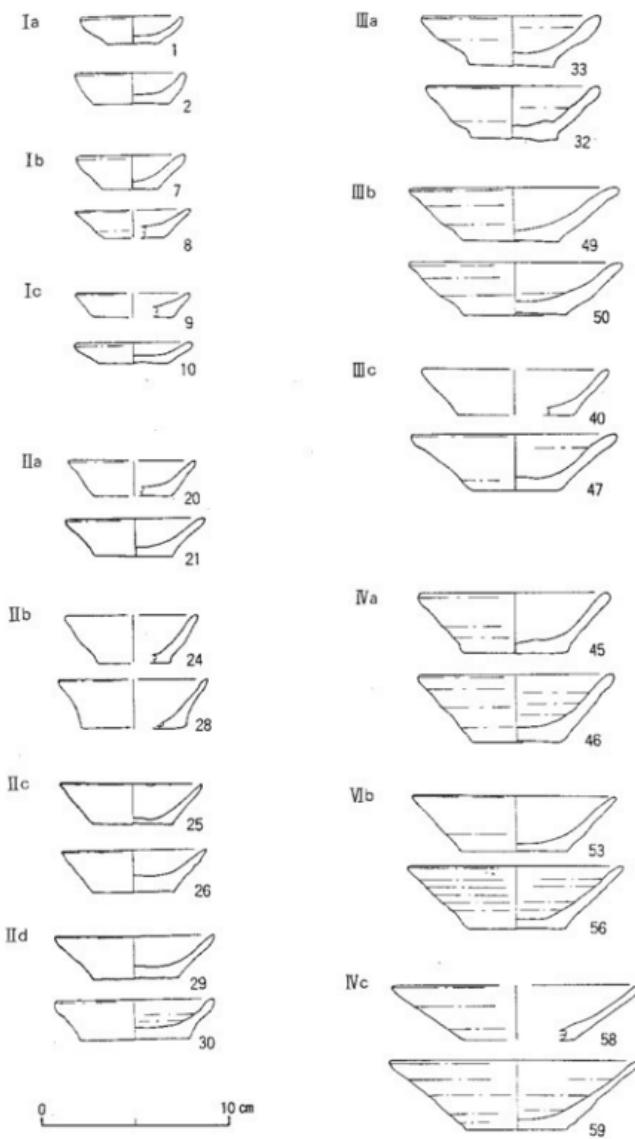
15代に亘る玉造氏の事跡について記された史料は極僅かであり、玉造城築城時に就いてもまだ定説はない。Ⅱ章でも触れたように玉造氏をはじめとする行方四頭（小高・麻生・島崎）が郡内に分流する気運が訪れるのは、吉田清幹一行方忠幹一行方景幹の3代が鹿島神宮社領との関係で史料に登場する建久2年（1191）から安治2年（1228）にかけて郡内に領地を獲得した頃からである。当時の国府には府中地頭職を勤め大掾職を復権した筆頭在庁官人常陸大掾馬場氏があり、清幹以後の鹿行地方進出を支え、景幹が露骨に神宮社領を侵犯なし得た背景的存在として重要であろう。こうした鹿島神宮との関係も7家7郡（行方・小栗・吉田・東條・鹿島・馬場）の地頭が巡年で神宮の七月大祭を仕切る大使役を勤めることで改善されて行く。文応元年（1260）には行方麻生次郎がこの大使役を勤めており行方四頭の郡内における定着が進んだことを窺せる。以上の点から玉造氏も13世紀前半には現在の地に城館を構えたと考えられるが、今回の調査ではこの時期に遡る資料は検出されていない。

本丸調査で検出された遺構は溝2条（SD 01・02）、井戸跡2基（SE 01・02）、掘立柱建物跡5棟（SB 01～05）、櫛列3条（SA 01～03）、方形堅穴遺構3軒（SI 01～03）、土坑2基（SK 01・02）などが主なものである。各々遺構のもつ性格あるいは関連性に就いてみておきたい。まず注目しておきたいのは南北溝SD 02により区画された西側の一帯である。結論から述べるとこの区画溝SD 02の西岸域は墓域であった可能性が強く、しかも城域に取り込まれている以上玉造氏一族に關係する菩提を弔った聖域的色彩の強い場所であったことが窺れる。この墓域が城館域の構造的拡大により或いは寺域まで含めた墓域の移転された証左として、SE 01最下層（調査の及んだ範囲において）の石塔類が重要な意味をもつものと考えられる。石塔は宝鏡印塔の笠石2個体、五輪塔笠石1個体が底貼粘土中より投棄的様相をもって検出されており、宝鏡印塔は両方とも四隅の馬耳形突起を欠損した状態である。SE 01が宿井戸として構築された年代は、検出された国産陶器の年代が14世紀前半から16世紀前半と幅があるが、底貼粘土層上面から天目茶碗66の接合資料が出土しているので16世紀前半の頃を考えている。石塔類に種子・銘字が認められず、共伴する上輪質土器皿34の年代比定も現況では難しいことから、16世紀前半の頃にSE 01の構築は行われると同時に、^(註3)石塔類は底貼粘土中に棄却投棄されたものとみておきたい。宝鏡印塔の在り方からいってやはり玉造氏直系の先祖または重臣の代々、あるいは開山者をも含めた菩提寺的色彩の強い空間が「本丸」に展開した時期があつたことになろう。旧永幸寺は文永9年（1272）に開山、玉造城本丸西隣の郭内に位置していたことが江戸時代の村絵図によって知られる。^(註4)その位置関係からみて本丸内に旧永幸寺の寺域が展開したとみるのが妥当であるが、墓域に關わる資料はSK 01などの遺構が認めら

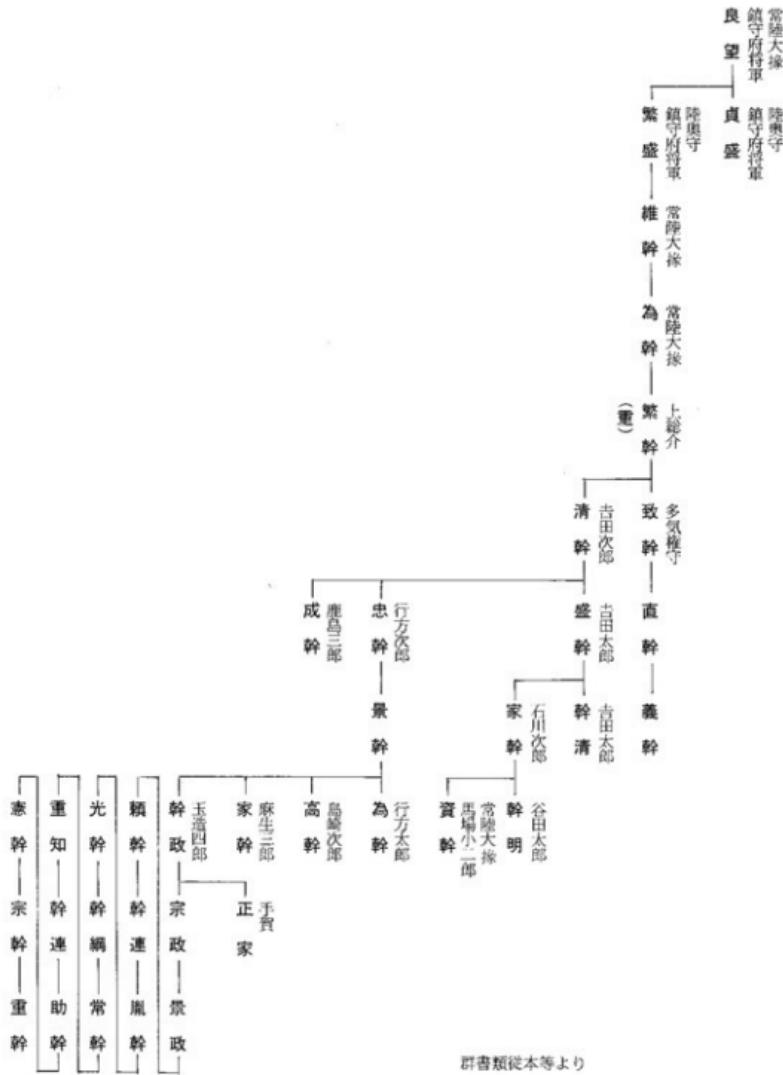
れるものの、寺院に関係する直接資料は検出されていない。SE 01 の構築に伴って SD 02 も埋戻され本丸の西側に面して間数の小さい掘立柱建物 SB 01 ~ 05 等が狭い地域に限定され建て替られるようになる。方形堅穴造構 SI 01 ~ 03 は SI 02 が SD 02 に切られることと主軸方向が異なることから恐らく掘立柱建物群とは時期的に重複しないと思われる。こうして城域を拡張した背景には16世紀前半代における周辺地域との政治的緊張関係が考えられよう。この時期玉造氏は行方惣家の小高氏と所領をめぐる争いで緊張状態にあり、「唐ヶ崎合戦」と称される戦闘があったと伝えられている。^(註9) SE 01 の砂層上にみられる多量の廃滓塊は、こうした状況下本丸で鉄鋳造が盛んに行われたことを示すものであろう。

本丸調査において検出された遺物は、土師質土器皿・土師質擂鉢・内耳土器・瓦器鉢・瓦質土器・国産陶磁器（吉瀬戸瓶子・瀬戸美濃焼天目茶碗・志野丸皿・伊万堀碗など）、中国陶磁（龍泉窯緋運弁文碗・景德鎮青花など）、鉄製品（刃子・角釘・小札・掛金具など）、古錢、石製品（砥石・硯など）、石塔類、その他にも繩文～奈良・平安時代の土器片等が出土している。ここでは土師質土器皿について若干の説明を加えておきたい。土師質土器皿は本文中において分類したが総体的にみてI・II類は小型皿、III・IV類は杯タイプの大型皿に大別可能と思われる（第24図）。口径と口高指値についてみると、Ia～Ic類の平均口径値 6.2 cm・口高指數平均値 25.6、以下 IIa～IId類 7.5 cm・28.7、IIIa～IIIc類 10.6 cm・26.8、IVa～IVc類 11.5 cm・29.0 となっており、I・II類の一群に比べて III・IV類の口径値が 1.6 倍程になっているのが解る。今回の調査ではこれ等遺物を伴なう遺構の重複や良好な一括資料に恵まれなかったので、ここで年代的位置付けを行うことは難しいが、IIIa類に含まれる大型皿34が SE 01 最下層（調査が及んだ範囲）の底貼粘土中の石塔類とともに出土しており他の大型皿に比してIIIa類の先行性が窺われる。またIVb・IVc類の皿は他の皿型土器と同じようにロクロ成形→回転糸切放し→乾燥→焼成→完成の基本的にケズリ調整を省いた技術系に継続するのであるが、特にIVc類にみるロクロ技術の飛躍的進歩はロクロの回転力向上に拘るところが大きいと思われ、成形手法はロクロに据えた粘土塊から直接器物を挽きだす、所謂水挽き手法に転換していることが窺われる。従ってIVb・IVc類の後続性もまた考慮しておく必要があろう。玉造城では以上の観点に立って I類とIII類、II類とIV類の対応を仮に想定しておきたい。このように大小のセットで捉えると、玉造城の場合に問題となるのは IId類とIIIa類の分離であるが、つまり小型皿 29・30 と大型皿 31・32 の違いと云うことになるが、これは器形と器肉のバランス或いは口底比などを総合的に判断するしかないであろう。以上みてきたように土師質土器皿にみられる大小セットの関係は中世の古い段階から認められ、本県でも門毛経塚・屋代B遺跡において大小のセットが捉えられる手づくね製土師質土器皿が出土している。玉造城址でも13世紀代に遡る手づくね製の皿型土器が発見される可能性が高いのである。

最後に玉造城の全景を視野に収めておきたいと思う。玉造城は本丸・二ノ丸・三ノ丸の三主郭を東西方へ並列に配した連郭式の形態をとる平山城である。三主郭は空堀によって独立した郭を構成し二ノ丸の標高が最も高く、本丸との比高差は 2 m 程ある。腰郭 I・II は三主郭を取り囲むように



第24図 土師質土器皿分類図



群書類從本等より

第25図 行方・玉造氏系図

一段低く配され、三ノ丸東の堀切から本丸北西方と南西方にある物見台的な場所を含めた本城の総面積は約5万坪である。城は自然地形を利用した要害で、三方は水田面に囲まれ城域の台地西縁辺と南縁辺は急崖をなす。城郭北面の普請は土塁・堀を複雑に配している。三ノ丸の東は台地の背も狭くなり掘切により城館の主体は完結する。城域の周辺部には「カラメ」「藏屋敷」「根古屋」等城郭に関連する字名が残り、現在は鉄道で切断されてしまったが掘切から東へ続く台地上には「馬場」^{註12)}「馬場尻」「マキノ内」「大坂り」「出戸」の字名がみえる。「出戸」の字名が飛地で残るところには「サンペイ堀」と呼ばれている堀・土塁が遺存する。ここを水戸へ抜ける街道が走っており、西へ向うと玉造城下へ通じる路である。この陸路は城下の「まちや」を抜けて「浜」という津へである。ここからは八方へ水路がひらけている。霞ヶ浦の水運もたらす経済的・文化的影響は具体的にどのようなものであったろうか。^{註13)}南北朝期すでに鹿島大使役に関する税の一部が銭貨で納められた記録ものこっており、水運によりもたらされる物資と一部導入された銭貨による「商い」の様子が、不透明ながらみえ隠れしてはいないだろうか。

註1 玉造町史編さん室『玉造町史』1985

註2 前掲書158P、鹿島大役の巡役に関する記録「鹿島大使役記」等を表にまとめてある。

註3 牛堀町大台城例のように礎石として一時期転用された可能性もある。

註4 覆土最上層部より志野丸皿68を検出しているが、これは埋没後の凹地に流入したものと考えられる。

註5 水藤 真「莊園の現地調査と石造遺物調査」共同研究『中世莊園の現地調査・太田莊の石造遺物』国立歴史民族博物館研究報告第9集

註6 前掲書283P、「文永9年（1272）玉造宗政開基。幹率の男永幸開山。天台宗、弘安3年（1280）逆行2世真教上人に帰依し時宗に改宗。」とある。

註7 大場家所蔵のものが2本ある。II章註参照。

註8 内宿集会所建設とともに調査で粘土貼土坑を発見したと聞いている。

註9 前掲書1、237P参照。

註10 阿久津久「門毛経塚遺物と中世陶器」『茨城県立歴史館報』12、1985

註11 鈴木美治「屋代B遺跡II」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』1987

註12 玉造町史編さん委員会『玉造町字界地形図』1990

註13 沙弥淨康書状「税所文書」『茨城県史料』中世編I

写 真 図 版

P L 1 玉造城本丸(写真中央)左隅に梶無川



PL 2 玉造城跡とその遠景



玉造城本丸北西部(帯曲輪から)



蔵屋敷・カラメ付近



本丸と二ノ丸を分つ空堀



二ノ丸(南西方から)



玉造城(手前は内宿の集落)



外郭をめぐる堀



弁財天谷津



サンベイ堀

PL. 3 南北(A)・東西(B)トレンチ全景



本丸



トレンチ設定状況



南北トレンチ



東西トレンチ(東から)



東西トレンチ(西から)



南北トレンチ中央

PL 4 遺構と遺物出土状況(1)



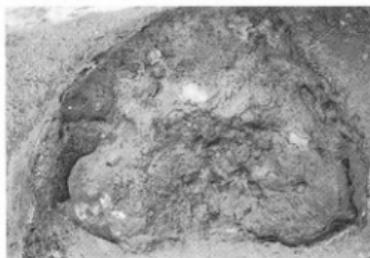
SE01全景



SE01下層



SE01上層



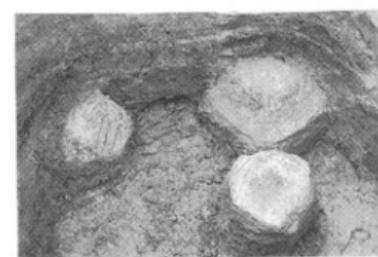
SE01鉄滓塊近景



SE01遺物出土状況



鉄滓中の土器



SE01下層, 五輪塔出土状況



SE01排土状況

PL 5 遺構と遺物出土状況(2)



南北トレンチ拡張部・SD02



東西トレンチ・SD02



SD02・遺物出土状況



南北トレンチ・SD01



SB02



SB01



SK01



長方形ピット掘り方

PL 6 遺構と遺物出土状況(3)



SK 02遺物出土状況



古錢出土状況



蔵屋敷全景



ニノ丸トレーニング設定状況



蔵屋敷テスト・ピット 2



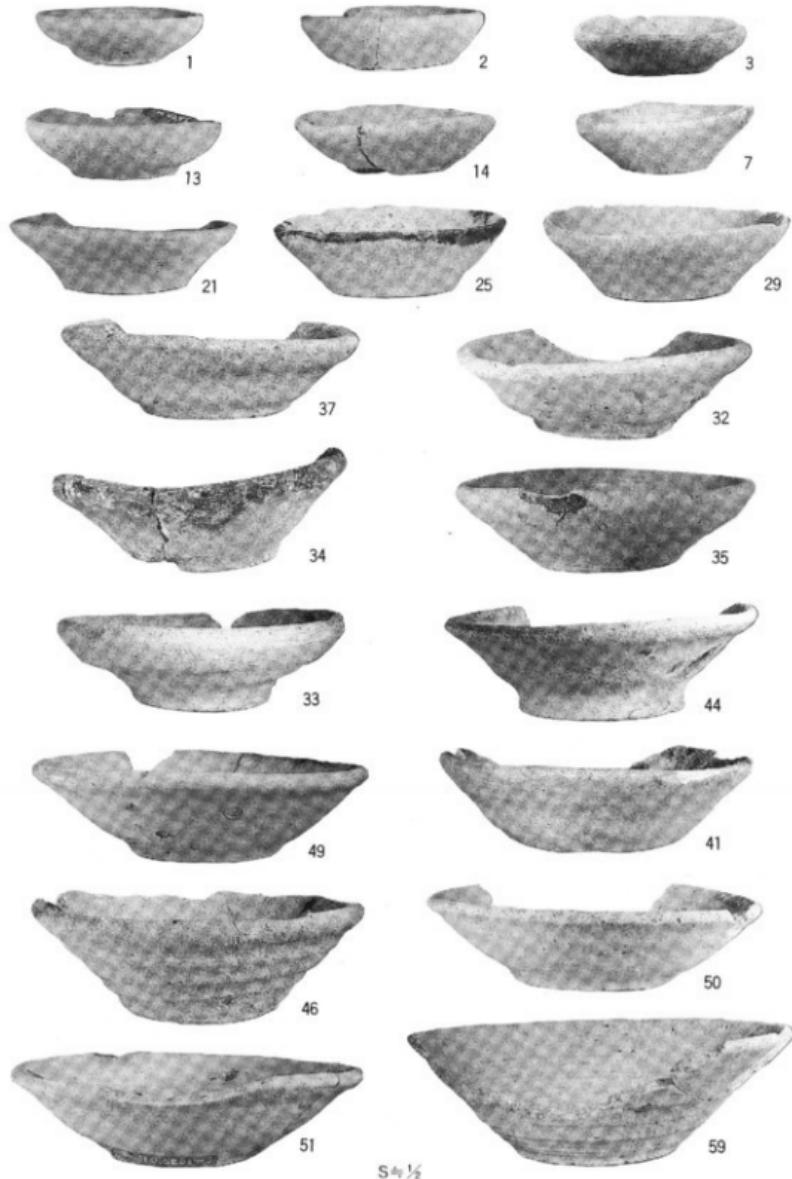
遺構確認状況(東から)



蔵屋敷テスト・ピット 1



PL 7 本丸出土 土師質土器・皿



S = $\frac{1}{2}$

PL 8 本丸SE01出土遺物(古瀬戸瓶子ほか)



61



62



63



64



65

S年15



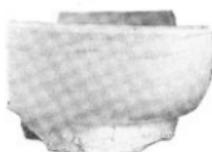
天目茶碗



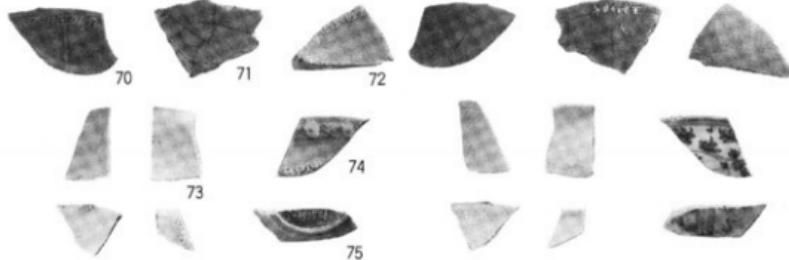
志野丸皿



志野丸皿



青磁碗(漆締ぎ痕有)

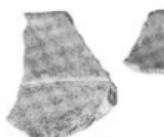


青磁・白磁・青花



76

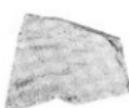
常滑焼



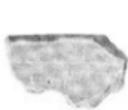
77



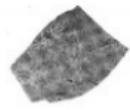
78



瀬戸・美濃灰釉陶器(中世後半)

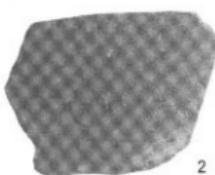


79

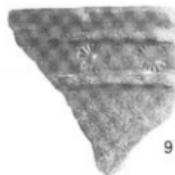


瀬戸・美濃灰釉陶器(近世)

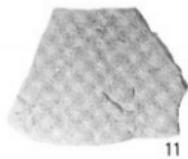
PL11 城内出土 印花纹・刻文



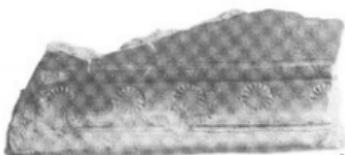
6



9

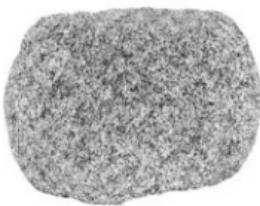
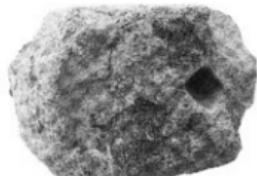
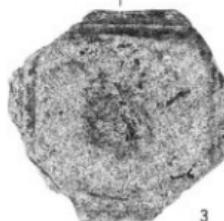
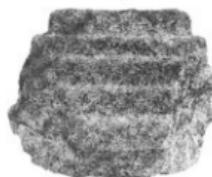
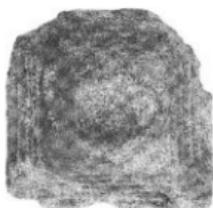
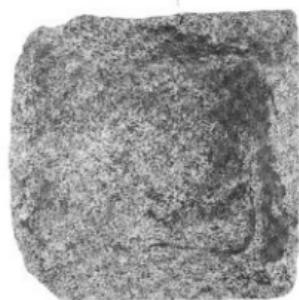
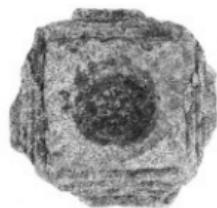


11

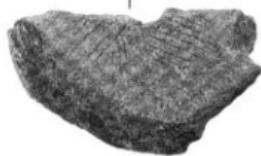


10

PL12 本丸SE01出土 石塔・石臼



6



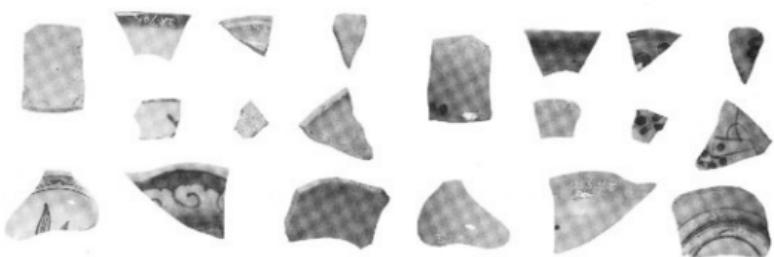
5

石臼S号%，他は%

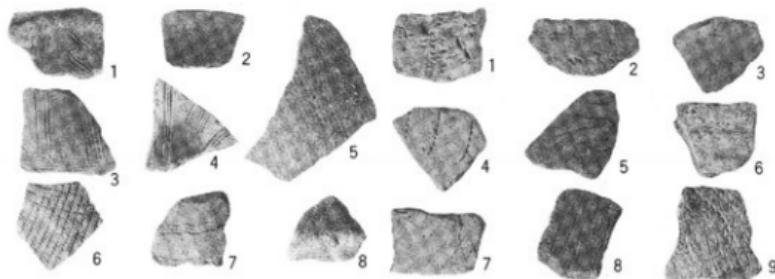
PL13 本丸出土 鉄製品



PL14 本丸出土遺物

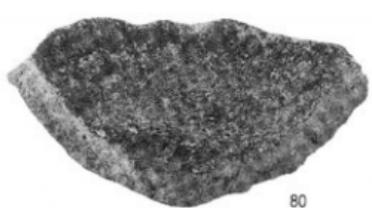


近世磁器 (S=1%)

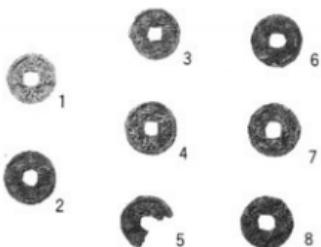


弥生式土器 (S=1%)

縄文式土器 (S=1%)

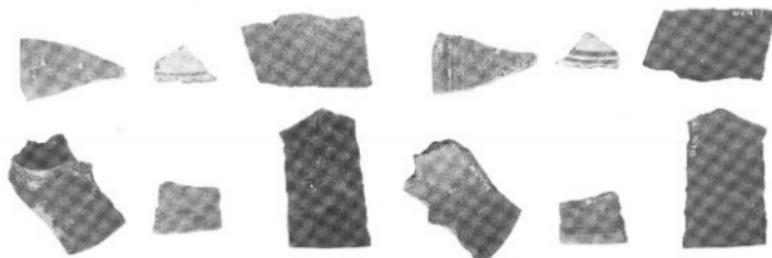


金粒の付着する埴塙 (S=1%)

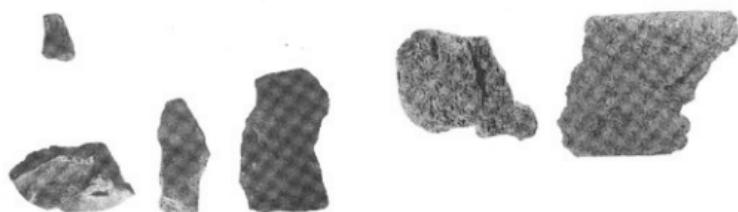


古銭 (S=1%)

PL15 玉造城二の丸・藏屋敷出土遺物



玉造城・藏屋敷出土遺物(1)



藏屋敷出土遺物(3)

藏屋敷出土遺物(2)



玉造城・二ノ丸出土遺物

S 1/2

行方郡玉造城跡本丸発掘調査報告書

付 二の丸・藏屋敷確認調査報告

1990年3月31日

編集 玉造町遺跡調査会
発行 玉造町教育委員会

印刷 (株) さんゆう社印刷